HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語の歴史と構造 (4) : 古ゲルマン諸語 (2)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 136, 53(左)-101(左)
Issue Date	2012-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/48733
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS136-2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 136 (2012)

ゲルマン語の歴史と構造 (4)
── 古ゲルマン諸語 (2) ──

清　水　　誠

Structure and Development of the Germanic Languages (4)
── Older Germanic Cognates (2) ──

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 136. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2012. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

6．西ゲルマン語 (1) ── 北海ゲルマン語

6.1. 北海ゲルマン語的特徴 ── 言語接触による共通性

北ゲルマン語圏は地理的には広大だが，話者数はオランダ語の約 2,100 万人にも満たない。ドイツ語の話し手はその 4 倍を越え，英語人口はヨーロッパだけでも 6,000 万人以上に達する。西ゲルマン語が歴史的に統一体を形成しないとしても，驚くには及ばない。西ゲルマン語はすでに述べたように 3 グループからなるが，北海ゲルマン語と残りの 2 グループをまとめた内陸ゲルマン語に分けられる。

北海ゲルマン語は「アングロサクソン人」(Anglo- Saxons) を筆頭とする人々がブリテン島に移住を開始した 5 世紀以前に，大陸部北海沿岸に居住していた諸部族の相互接触によって成立したとされるグループである。文献は古英語，「フリジア人」(西フ Friezen) の古フリジア語，「ザクセン人」(ド Sachsen) の古ザクセン語で伝えられている。「北海ゲルマン語的特徴」(ド Ingwäonismen) といわれる共通性が目印であり，再帰代名詞の消失，人称代

名詞の語尾 -r の消失（例．英 we/me/you↔ド wi***r***/mi***r***/ih***r***），動詞の複数形人称変化が 1 種類に統一された「統一複数」（ド Einheitsplural）などの形態面のほかに，次の音韻的特徴が含まれる[1]。

① 閉音節（子音で終わる音節）のゲルマン祖語の a，(ē¹＞)ā は開口度が狭まって，æ/e，ǣ/ē になる
古英 st***æ***f「杖」，d***ē***d/d***ǣ***d「行為」，古フ st***e***f，d***ē***d(e)，古ザ st***e***f/ st***a***f，d***ā***d↔古高ド st***a***b，t***ā***t
（英 staff，deed，西フ stêf［stɛ:f］，die(d)［diə(t)］↔ド Stab，Tat，オ staf，daad）

② ゲルマン祖語の a/(ē¹＞)ā は鼻音 m/n の前で o/ō になる
古英 m***o***n/m***a***n「人」，m***ō***naþ「(暦の）月」，古フ m***o***n，m***ō***nath，古ザ -m***o***n/m***a***n，m***ō***nað/m***ā***nuð↔古高ド m***a***n，m***ā***nōd
（英 man，month，西フ man［mɔn］，moanne［ˈmwanə］↔オ man［mɑn］，maand［maˑnt］，ド Mann［man］，Monat［ˈmo:nat］）

③ 鼻音 n は「母音＋無声摩擦音 s/f/þ（＝th）」の前で脱落し，鼻母音化を経た母音はそれを補うように「代償延長」（compensatory lengthening）で「長音化」（lengthening）する（後に口母音化で鼻音性を消失）
古英 ***ū***s「我々を」，f***ī***f「5」，***ō***þer「第 2 の」，古フ ***ū***s，fīf，***ō***thar，古ザ ***ū***s，f***ī***f，***ō***ðar↔古高ド ***un***s，f***im***f/f***in***f，***an***dar
（英 us，five，other，西フ ús［ys］，fiif［fi:f］，oar［oər］↔ド uns，fünf，ander，オ ons，vijf，ander）

④ 口の奥で発音する軟口蓋子音 k(k)，gg，g は，前寄りの硬口蓋で発音する母音 i，e や j /j/が続くと，同じく前寄りで発音する破擦音/tʃ/，/dʒ/や摩擦音/j/に変わる。これを「口蓋化」（硬口蓋化，palatalization）とい

[1] これとは別に，スイスドイツ語の一部とアルザス方言を含む南西部のドイツ語方言でも，統一複数や③の摩擦音の直前での n の脱落が観察される。König (1998¹²：158 f.) の方言地図参照。

う。ドイツ語やオランダ語の過去分詞などに残る接頭辞 ge-（古英 *ġe-* /jə/）は，弱まって消失した。

古英 ***ċ***ir(i)ċe「教会」(ċ/tʃ/↔スコ ***k***irk [k])，le***ċġ***an「横たえる」(ċġ /dʒ/)，古フ ***tz***iurke，le***dz***a，古ザ ***tz***erk-/***k***irika，le***gg***ian↔古高ド ***k***irihha，le***g***en (英 church，lay，西フ tsjerke ['tʃɛrkə]，lizze ['lɪzə] ↔ド Kirche，legen，オ kerk，leggen ['lɛɣə(n)])

語末の g/k は i/ī などの硬口蓋母音が先行すると，/j/，/tʃ/に口蓋化する。例. 英 da***y***，whi***ch***，I (***Ch***ill＝I will，シェイクスピア) (＜古英 dæ***ġ*** (*ġ* /j/)，hwel***ċ***，i***ċ***)↔ド Ta***g***，オ wel***k***，i***k***

ただし，借用による例外など，現代語では不明な点もある。たとえば，語頭音 g [g] を示す英語の***g***et「得る」は古ノルド語からの借用，***g***ive「与える」もその影響による。古英語は for***ġ***ietan「忘れる」(英 for***g***et)，***ġ***iefan「与える」，西フリジア語は fer***j***itte「忘れる」，***j***aan「与える」であり，それぞれ *ġ* /j/，j [j] となる。基本的には内陸ゲルマン語に分類されるオランダ語にも，部分的に共通点がある (vijf「5」など)。フランケン人を母体とした標準オランダ語の先駆けである古低フランケン方言は，海岸部では「北海ゲルマン語的特徴」を一部で共有するようになったらしい。一方，文献に現れた古ザクセン語は，古フランケン語の影響で内陸ゲルマン語の特徴を色濃く反映している。結果的に古英語と古フリジア語に共通点が目立つので，古くは「アングロ・フリジア語」(Anglo-Frisian) という統一体を想定していたが，現在では認められていない。

6.2. 古英語 ── アングロサクソン・イングランドの変遷

イギリス本島は「大ブリテン島」(Great Britain) と呼ばれる。「ブリテン」とは，紀元前約 1000 年頃に大陸から移住したケルト人部族のブリトン人 (Britons) にちなむ名称である。フランス北部ブルターニュ半島 (フラ Bretagne) には，後にイギリスから移住したケルト語派ブルトン語の話者が暮らしている。同じくケルト語が残っているスコットランド (Scotland)，

ウェールズ（Wales），アイルランド（Ireland）などの地方を除くイングランド（England）が古英語（Old English）の使用地域である。紀元前 55/54 年にはカエサルによるローマ帝国侵攻を受け，紀元後 43 年から約 350 年間，その属国ブリタンニア（ラ Britannia）となった。

410 年にローマ軍が撤退すると，450 年頃からは民族大移動の中で大陸のゲルマン部族が 100 年ほどの間に移住し，6 世紀末までに「アングロサクソン七王国」（Anglo-Saxon Heptarchy）を築いた。まず，ユトラント半島出身のジュート人（Jutes，ド Jüten「ユート人」）が南東部のケント（Kent）に定住した。ユトラント半島は現在，北ゲルマン語に属するデンマーク語圏だが，当時のジュート人は別の部族である（ブルンナー 1997²：6f.）。続いて，北ドイツのエムス川（ド Ems）とヴェーザー川の間から移り住んだサクソン人（Saxons）が一部のフリジア人を交えて，テムズ川（Thames）以南のサセックス（Sussex），ウェセックス（Wessex），エセックス（Essex）に居住した（それぞれ South Saxons，West Saxons，East Saxons の意味）。最後に，アングル人（Angles）はテムズ川（Thames）以北に渡り，北部のノーサンブリア（Northumbria），中部のマーシア（Mercia）とイースト・アングリア（East Anglia）を興した。現在でもドイツ最北部のシュレースヴィヒ地方の東部は，アングル族にちなんでアンゲルン地方（ド Angeln）という。イングランド（England＜古英 Englaland）という名称も，「アングル人の（Engl-＜古英 Engla-）国（-land）」に由来する。9 世紀からは七王国を統一したウェセックスが中心となり，ウィンチェスター（Winchester）を都として，アルフレド大王（Alfred the Great，古英 Ælfrēd 849～899，在位 871～899）の時代に「アングロサクソン・イングランド」（Anglo-Saxon England）の文化が栄えた。古英語は統一的言語ではなく，マーシア方言（Mercian）とノーサンブリア方言（Northumbrian）にウェスト・サクソン方言（West Saxon），ケント方言（Kentish）を加えた 4 大方言の集合である。

古英語の文献は 700 年頃に現れ，1100 年頃まで続く。この時期にこれほど豊かな文献を伝えるゲルマン語は例を見ない。これはアングロサクソン人がいち早く 600 年頃に完全にキリスト教に改宗し，ラテン文字を導入して，ラ

テン語文献の翻訳や宗教文献を記し始めたことによる。韻文では，8 世紀初頭に成立した怪物退治の主人公の名前を冠した英雄伝『ベーオウルフ』(*Beowulf*，8 世紀初頭)，散文では，アルフレド大王の命で編纂が開始された『アングロサクソン年代記』(*Anglo-Saxon Chronicle*) をはじめ，ウェスト・サクソン方言を中心に数々の資料が残っている。

古英語は現代英語とは非常に異なっており，解読は至難の業(わざ)である。古語との距離がこれほど大きいゲルマン語は，ほかにない。ドイツ語のようなウムラウトの母音が残っており，名詞類は男性・女性・中性，主格・対格・属格・与格，単数・複数に応じて変化する。代名詞・冠詞には具格，1・2 人称代名詞には双数の残存がある。形容詞は弱変化と強変化に分かれて語形変化する。動詞は 7 系列の母音交替による強変化動詞，3 種類の歯音接尾辞を伴う弱変化動詞，過去現在動詞に分かれる。直説法と仮定法は現在と過去を区別し，主語の人称と数(すう)に応じて広範に変化する。語彙を含めて，古英語はかなり現代のドイツ語に似ているともいえる。ドイツ語（斜体字で示す）との比較から例を挙げてみよう。

① 名詞の性（単数主格，古英　gōd「良い」↔ド *gut*）
　男性　se gōda cyning↔*der gute König*「その良い王」
　女性　sēo gōde lār↔*die gute Lehre*「その良い教え」
　中性　þæt gōde sċip↔*das gute Schiff*「その良い船」(þ＝th)

② 名詞・定冠詞・形容詞弱変化の格変化（男性強変化名詞）

主格	単数	se gōda cyning	複数	þā gōdan cyningas
		der gute König		*die guten Könige*
対格		þone gōdan cyning		þā gōdan cyningas
		den guten König		*die guten Könige*
与格		þæm gōdan cyninge		þæm gōdum cyningum
		dem guten König		*den guten Königen*
属格		þes gōdan cyninges		þāra gōdra (gōdena) cyninga
		des guten Königs		*der guten Könige*

③　動詞の直説法現在・過去人称変化（弱変化 hīeran/*hören*「聞く」）[2]

iċ｛hīere/hīerde｝↔*ich*｛*höre*/*hörte*｝「私は｛聞く/聞いた｝」

þū｛hīerst/hīerdest｝↔*du*｛*hörst*/*hörtest*｝「君は｛聞く/聞いた｝」

hē/hēo/hit｛hīerþ/hīerde｝↔*er*/*sie*/*es*｛*hört*/*hörte*｝「彼/彼女/それは｛聞く/聞いた｝」

wē｛hīeraþ/hīerdon｝↔*wir*｛*hören*/*hörten*｝「私たちは｛聞く/聞いた｝」

ġē｛hīeraþ/hīerdon｝↔*ihr*｛*hört*/*hörtet*｝「君たちは｛聞く/聞いた｝」

hīe｛hīeraþ/hīerdon｝↔*sie*｛*hören*/*hörten*｝「彼(女)ら/それらは｛聞く/聞いた｝」

④　強変化動詞（直説法）のウムラウト(＝U)と母音交替(＝A)

不定詞―現在3人称単数(U)―過去単数(A)―過去複数(A)―過去分詞(A)

Ⅰ　bītan―bītt―bāt―bidon―(ġe)biden「噛む」

beißen―beißt―biss―bissen―gebissen

Ⅱ　bēodan―bīett―bēad―budon―(ġe)boden「提供する」

bieten―bietet―bot―boten―geboten

Ⅲ　bindan―bint―band―bundon―(ġe)bunden「結ぶ」

binden―bindet―band―banden―gebunden

Ⅳ　beran―bi(e)rþ―bær―bǣron―(ġe)boren「運ぶ」

gebären―gebiert/gebärt―gebar―gebaren―geboren「生む」

Ⅴ　ġiefan―ġiefþ―ġeaf―ġēafon―(ġe)ġiefen「与える」

geben―gibt―gab―gaben―gegeben

Ⅵ　faran―færð―fōr―fōron―(ġe)faren「行く」

fahren―fährt―fuhr―fuhren―gefahren

Ⅶ　healdan―hielt―hēold―hēoldon―(ġe)healden「保つ」

halten―hält―hielt―hielten―gehalten

---

[2] 3人称代名詞単数男性・女性形は「彼，彼女」のほかに，文法性に応じて「それ」の意味にもなる。「北海ゲルマン語的特徴」として，動詞人称変化は複数形で「統一複数」による1種類。

英語はアフリカーンス語と並ぶ形態的簡素化をはじめ，語彙や統語構造も大変革を遂げたユニークなゲルマン語である。それには外部勢力による 2 度の征服を被り，異言語から強い影響を受けた点が大きい。『ベーオウルフ』の舞台となったデンマークはアングロサクソン人の故地だが，8 世紀後半から 11 世紀半ばまでのヴァイキング時代には，その地のデーン人とノルウェー人ヴァイキングからたび重なる襲来を受けた。アルフレド大王自身，878 年にはロンドンとチェスター（Chester）を結ぶ線の北側を「デーンロー」（Danelaw），つまりデーン人の法律の及ぶ地域と認めるに至った。その北側の古英語文献の多くは，デーン人によって焼き払われてしまったという。1016 年にはデーン人のクヌート（Canute 994？〜1035）に王位を奪われ，デーン王朝が始まる。この間，古ノルド語の語彙が大量に流入した。上述の get，give のほかに，call，die，guess，hit，raise，take，want などの基本動詞，代名詞 they/their/them，「二重語」（doublet）と呼ばれる dike「溝，水路」（「堤防」の意味は中期オランダ語の影響）↔ditch「同左」，garden「庭」↔yard「同左」，kist「（大型の）箱」↔chest「同左」，skirt「スカート」↔shirt「ワイシャツ，シャツ」（古ノルド語起源↔古英語起源，口蓋化の有無に注意）など多数の例がある。それだけではない。古英語と古ノルド語は類似性が高く，共通語彙が多かった。そのため，ヴァイキングとの接触が頻繁だった北部と中東部から，文法的機能を表わす語尾の摩滅を中心に形態的簡素化が生じ，両言語の混成による「クレオール化」（creolization）が進行したともいわれている。

1066 年にはノルマン征服によって，北フランスのノルマンディー公ウィリアム（William of Normandy 1027？〜1087）にイングランドを支配された。「ノルマン人」（Normans）とはフランス北西部に王国を建て，フランス語を母語としたヴァイキングの子孫を指す。以後 300 年余り，英語は公的使用の舞台から消え，フランス語が強要される時代が続く。その間，大量のフランス語の語彙が借用され，言語構造が大きく変化していった。

6.3. フリジア人の歴史 ── 北海の民の栄枯盛衰

古代ローマの歴史家によれば，フリジア人はライン川河口からオランダと

ドイツの国境付近を流れるエムス川河口までの北海沿岸に定住していたという。この地はローマ帝国の外に位置し，ゲルマン人の居住地ではなく，ゲルマン語起源ともケルト語起源とも異なる印欧語の地名が散見され，そのルーツには謎がある。

5 世紀半ばに始まるアングロサクソン人のブリテン島移住時代には，フリジア人は人口が希薄になったエムス川以東の土地に拡大し，ヴェーザー川河口にまで及んで，牧畜と航海で生計を立てていた。そこからベルギー北部フランドル地方を流れるスヘルデ川（オ Schelde）の南岸を南端とする北海沿岸一帯は，7 世紀前半には「大フリジア」（ラ Frisia Magna）と呼ばれていた。当時，北海は「フリジア人の海」（ラ Mare Frisicum）とも形容されていたが，たび重なるその荒波の脅威に備えて，海面下の土地に「テルプ」（西フ terp）と呼ばれる盛り土を設けて集落を形成し，雨水と海水を排出するために縦横に水路が掘られた。10 世紀末まで，テルプは水の脅威からの唯一の防衛手段であり，堤防の建設と陸地の回復は 11 世紀に始まる。700 年頃にはスカンジナヴィアとの交易ルートの中継地点として，デンマークとの国境付近にあたる北ドイツ北海西岸の北フリースラントの島々に移住が行われた。約 300 年後にはおそらくデンマーク王の招きで，同地の大陸部を中心に 2 回目の移住がなされ，両者をあわせて北フリジア語話者の祖先となった。

7 世紀末には南からフランケン人の攻撃を受け，スヘルデ川からライン川までの土地を奪われた。フリジア人はフランク王国にキリスト教を伝えたアングロサクソン人の聖ボニファーティウスを 754 年に古都ドクム（オ Dokkum）で殺害するなどして，抵抗した。しかし，フランク王国のザクセン制圧の過程で，785 年にはカール大帝の支配に下った。9 世紀初頭までにはキリスト教も浸透した。9 世紀末から 10 世紀初めには，デーン人ヴァイキングの襲来を経験している。843 年のフランク王国分裂後は東フランク王国の一部となり，925 年にはそれを受け継ぐドイツ王国に帰属した。以後，ホラント地方（オ Holland）の影響が強まり，1289 年にはエイセル湖（オ IJssel，当時はザイデル海（オ Zuiderzee））以西の「西フリースラント」がホラント伯領となって，オランダ語化が進行した。現在，同地は南・北ホラント州として

オランダ政治経済の中心を担っている。「西フリースラント」(オ Westfriesland) という名称は北ホラント州の北部地方を指し，エイセル湖以東の西フリジア語圏である下記の「フリースラント州」とは異なるので，注意を要する。残りは神聖ローマ帝国直属とされた。1464 年には「東フリースラント」(ド Ostfriesland) がザクセン人ツィルクセナ家 (ド Cirksena) の手に落ち，港湾都市エムデン (ド Emden) を中心に低地ドイツ語圏に変わっていった。その東側のオランダ北東部でも，当時は低地ドイツ語圏だったハンザ同盟都市フローニンゲン (オ Groningen) の影響で非フリジア語化が進んだ。

一方，沼地と湿原に阻まれ，外部支配が行き渡らない辺境にあって，古くは「中部フリースラント」(オ Middelfriesland) と呼ばれた現在の西フリジア語地域はフリジア人の故地であり，強固な砦だった。これはラウエルス川 (かつては海，西フ Lauwers) 以西からエイセル湖までの地域を指し，現在の大堤防以東のオランダ北部に位置するフリースラント州にあたる。3 つに分かれるフリジア語群で最も有力な西フリジア語の正式名を Westerlauwersk Frysk，すなわち「ラウエルス川以西の (Westerlauwersk) フリジア語 (Frysk)」というのは，このためである。当地の人々は長期間，「フリジア人の自由」と呼ばれる独立自尊の精神を保ち続けた。フリジア人の拡張はこの地から起こり，結果的にこの地に押し戻されたといえる。

「フリジア人の自由」とは，フリジア人はすべて平等で，神聖ローマ皇帝以外にどんな勢力にも隷属しないという意識である。フリジア人は封建制度による主従関係を発達させず，「貴族」とも自称する独立農民の自治による複数の「共和国」の枠にとどまった。堤防建設による治水灌漑 (かんがい) の技術革新に呼応して，社会的組織化が必要になった 12 世紀には，「フリースラント七海浜国」(西フ De sân Fryske Seelannen) が誕生した。そして，東フリースラントの都市アウリヒ (ド Aurich) 近郊で東西フリジア人共通の同盟「ウプスタルスボーム」(低ド Upstalsboom) を結成し，毎年，会合を開いて相互協力を確認し，外部の圧力に抵抗し続けた。1345 年にエイセル湖畔のヴァーンス (西フ Warns) でホラント伯の軍隊を撃退したことを記念する石碑には，「奴隷よりも死を」(西フ *Leaver dea as slaef*) と刻まれている。

しかし，14 世紀半ば以降は，天災やペストの流行に加えて 2 大豪族間の対立が激化し，ラウエルス川以西のフリースラントも 1498 年にザクセン公の前に「フリジア人の自由」を失った。1525 年にはハープスブルク家（ド Habsburger）のカール 5 世（ド Karl V. 1500〜58）の手に渡り，フローニンゲン周辺を含めてオランダ語化が進行した。1581 年にはスペインのオランダ語圏南部支配に対抗するユトレヒト同盟に組み込まれて「ネーデルラント北部七州」の一翼を担い，精神的アイデンティティの保持に腐心する時代を迎える。

6.4. 古フリジア語 ── 言語史の時代区分をめぐって

「古フリジア語」（西フ Aldfrysk）の資料は，500〜800 年頃と推定される 20 弱のルーン銘文を除けば，1200 年頃の語彙集しかない。本格的に始まるのは，13 世紀後半の法律文書からであり，他の西ゲルマン語の古語に比べてかなり遅い。

古（＝古期）英語 700〜1100　中（＝中期）英語 1100〜1500　初期近代英語 1500〜1700　後期近代英語 1700〜1900　［現代英語 1900〜］
古（＝古期）ザクセン語 800〜1100　中低（＝中期低地）ドイツ語 1100〜1600　新低（＝新期低地）ドイツ語 1600〜
古高（＝古期高地）ドイツ語 750〜1050　中高（＝中期高地）ドイツ語 1050〜1350　初期新高（＝新期高地）ドイツ語 1350〜1650　新高（＝新期高地）ドイツ語 1650〜
古（＝古期）オランダ語 900〜1200　中期オランダ語 1200〜1550　初期新期オランダ語 1550〜1650　新期オランダ語 1650〜
古（＝古期）フリジア語 1200〜1550　中期フリジア語 1550〜1800　新期フリジア語 1800〜

「古，中，新」または「古期，中期，新期」は個々の言語史の相対的区分であり，西洋史の「古代，中世，近代」とは異なる。「古代」は西ローマ帝国滅亡までを指す歴史学用語であり，「古期」にあたる西ゲルマン語の古語はすべ

て「中世」に属する。「古代英語，古代ドイツ語」などの名称は好ましくない。下位区分として，「初期，後期」を交えることもある。

古フリジア語の時代には，他の西ゲルマン語はすべて中期に移行していた。西ゲルマン語では古期から中期への移行は，語末の無アクセント母音が区別を失って「あいまい母音」（schwa）の e［エ ə］に弱化したことを重要な基準とする[3]。古フリジア語は古英語と共通性が高いが，それは 1450 年以前の「古典期古フリジア語」（Classical Old Frisian 1276/1300〜1450）に限られている。古典期古フリジア語はこの意味で「古期」の性格を部分的に残しているが，「ポスト古典期古フリジア語」（Post-Classical Old Frisian 1450〜1525）とはかなり異なり，その差は古高ドイツ語と中高ドイツ語ほど大きい。そこで，「ルーン文字フリジア語」（Runic Frisian 〜1100），「古フリジア語」（Old Frisian 1200〜1400），「中期フリジア語」（Middle Frisian 1400〜1550），「初期近代フリジア語」（Early Modern Frisian 1550〜1880），「近代フリジア語」（Modern Frisian 1800〜）に分ける提案もある[4]。

古フリジア語の写本の出土地はエイセル湖からヴェーザー川までに及ぶが，1450 年以降は東側地域の書き言葉が低地ドイツ語に変わったために，ラウエルス川以西に限られている。方言区分として「古東フリジア語」（Old East Frisian）と「古西フリジア語」（Old West Frisian）に分けることもあるが，これは実質的にそれぞれ古典期とポスト古典期という時代区分に対応し，前者はラテン語，後者は低地ドイツ語とオランダ語から正書法上の影響を受けている。古東フリジア語は西側の「古エムス川フリジア語」（Old Ems Frisian）と東側の「古ヴェーザー川フリジア語」（Old Weser Frisian）に下位区分される。

---

[3] あいまい母音［ə］のカナ発音には［エ］以外にも［ア，ウ］などが適切な場合もある。現代ゲルマン諸語では語末などの無アクセントの e 以外の文字も，あいまい母音［ə］を表すことがある。厳密には古語についても，e 以外の a/i/o/u の表記であっても，すでにあいまい母音［ə］に弱化していた可能性が考えられるケースがあるが，これ以上は踏み込まない。

[4] Bremmer（2009：123）参照。

古フリジア語文献の大半は法律文書であり，この点では他の古ゲルマン諸語を凌駕している。無味乾燥な条文ではなく，日常生活を具体的に描写し，初期の資料には頭韻などの技巧を交え，文学的香りを漂わせるくだりも散見される。同じ条項が種々の写本にくり返し記されている点も，特徴的である。手紙や年代記なども，古典期以後を中心に 1,300 点余り残っている。伝説や宗教的テキストもあるが，叙情詩や物語は皆無である。最古の写本は 1276〜1300 年と推定されるが，何世紀も前から口頭で伝えられてきたことは疑いない。すでにフランク王国時代に，カール大帝は『フリジア人法典』（ラ *Lex Frisionum* 802 頃）をラテン語で編纂させている。

フリジア人が母語で法典を記した事実は，「フリジア人の自由」による立法権が外部勢力の干渉を阻止していた証拠である。しかし，古フリジア語文献が法律関係に限られ，これほど遅い時期に集中しているのは，それとは裏腹の切迫した政治情勢によるとも考えられる。13 世紀後半以降，外部勢力の圧迫は激しさを増し，フリジア語は低地ドイツ語とオランダ語の脅威下にあった。ウプスタルスボームの会合では，1300 年以前に法律文書が作成された例は稀であり，最後の会合は多数の写本が誕生した頃の 1323〜27 年に開かれている。人々は「フリジア人の自由」を精神的砦とし，自らの社会規範を母語で文書化することで団結心を鼓舞したのだろう。1450 年以降，東部地域の文章語は低地ドイツ語に移行した。1540 年以降になると，古フリジア語文献はラウエルス川以西の地域でもほとんど姿を消し，沈黙の時代が訪れる。古フリジア語期の終わりはその公的機能の終焉（しゅうえん）でもあった。

6.5. 古ザクセン語 ── フランク王国との確執を刻む言語

古英語の「サクソン人」とここで述べる「ザクセン人」は，「フランク人」と「フランケン人」と同様に英語とドイツ語による名称で，ルーツは同じである。前者はイギリスに移住し，後者はドイツ語圏北部とオランダ語圏北東部にとどまった。ギリシャの地理学者プトレマイオス（Ptolemaios 95 頃〜160 頃）の著作では，ザクセン人はエルベ川以東の河口付近にあたるホルシュタイン地方に定住し，名称の由来となった「短剣」（古ザ sahs）を携えた戦

闘的部族とされている。3 世紀には他の 3 部族を吸収し，エルベ川とエムス川の間の北海沿岸に及んだ。350 年頃までにはフランケン人と結託して，ライン川とヴェーザー川上流に進出した。400 年頃にはエルベ川ゲルマン人に属するランゴバルド人を南に追いやり，529 頃～31 年にはフランケン人とともにドイツ中東部のテューリンゲン地方（ド Thüringen）の北部を制圧して，エルベ川中流に版図を広げた。8 世紀半ばの領土は 1 辺を約 320 km とする正三角形に似て，北はデーン人，東はスラブ人，北西はフリジア人，残りの方角はフランケン人の居住地に接していた。しかし，ザクセン人はフリジア人と共通の「ガウ」（ド Gau）と呼ばれる 100 余りの共同体にとどまり，唯一の王を戴く統一体を確立させなかった。

6 世紀半ば以後は，反目関係となったフランケン人から，ローマカトリック教会を後ろ盾に強大な封建国家に成長したフランク王国として，攻撃を浴びるようになる。反骨の勇士ヴィドゥキント（Widukind 743 頃～807 頃）も抵抗をあきらめて 785 年に洗礼を受け，30 余年に及んだ「ザクセン戦争」（Saxon Wars 772～804）の末にカール大帝に屈した。9 世紀半ばの農民同盟「ステリンガ」（Stellinga）の反乱も鎮圧され，852 年には東フランク王国にザクセン公国として組み込まれた。以後，神聖ローマ帝国内でドイツ語圏の一員として歴史を刻んでいく。古ザクセン語地域は，エイセル川以北のオランダ北東部にも及んでいた。現在，この地域はオランダ語圏の低地ザクセン方言の使用地域になっており，標準オランダ語の基盤である低地フランケン方言とは歴史的に異なるグループに属している。

「古ザクセン語」（ド Altsächsisch，800～1100）は北海ゲルマン語の一員だが，ザクセン人の社会は当初から内陸ゲルマン語の話者集団を含み，フランク王国への編入過程で性格を変え，中・南部の高地ドイツ語圏に引き寄せられていった。現在のドイツでザクセンという名は「ニーダーザクセン」（ド Niedersachsen）のほかに，内陸部の「ザクセン・アンハルト」（ド Sachsen-Anhalt），「ザクセン」（ド Sachsen）の 3 州に見られる。古ザクセン語は，現在の標準ドイツ語の前身である古高ドイツ語とは別の言語だった。「古低ドイツ語」（古期低地ドイツ語，ド Altniederdeutsch）という呼び名もあるが，こ

れは現代語を基準にした名称である。前述のように，その領域はオランダ北東部にまたがり，北ドイツの西半分で終わっていた。シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州（ド Schleswig-Holstein）の州都キール（ド Kiel）から南にのばした垂線に交わるエルベ川以東の北ドイツは，まだスラブ語圏だったのである。今でもドイツ南東部のシュプレー川（ド Spree）沿いには，西スラブ語に属するソルブ語（Sorbian）が残っている。

12 世紀以降，古ザクセン語は「東方植民」によってエルベ川以東に広がった「中低ドイツ語」（中期低地ドイツ語，Middle Low German，ド Mittelniederdeutsch 1100〜1600）として受け継がれていく。そして，1241 年に同盟を結んだリューベク（ド Lübeck）とハンブルク（ド Hamburg）を中心に，ハンザ同盟都市の商人の旺盛な経済活動を通じて，北欧とバルト諸国を含む北ヨーロッパ広域に共通の意思疎通手段，すなわち「リングワ・フランカ」（ラ lingua franca）として全盛をきわめた。その勢力範囲は，西はロンドンとベルギー・フランドル地方の古都ブリュージュ（オ Brugge「ブリュヘ」），東はロシアの古都ノヴゴロト，北はノルウェー西部のベルゲンにまで及んだ。その後，16 世紀にはハンザ同盟の衰退とともに零落し，低地ドイツ語としてドイツ語方言に下った。

6.6.『ヘーリアント』と古ゲルマン詩の伝統 ── 頭韻と脚韻の間

古ザクセン語を代表するのは，キリストの生涯を新約聖書の四福音書を凝縮して描いた 5,983 行の長詩行からなる『ヘーリアント』（古ザ *Heliand*，「救世主」の意味，830〜50 頃）である。これはゲルマン語最古の韻文によるキリスト伝である。物語の舞台を北ドイツの風景に移し替え，語彙の意味も含めてキリスト教思想をゲルマン的概念世界に焼き直し，同胞たちの理解に配慮した半創作的作品といえる。天使にキリスト誕生を告げられた羊飼いを馬の飼育者に変更し，キリストを天の王，使徒たちを従者にたとえ，山上の垂訓をゲルマン人の首長会議（古ザ thing）になぞらえてクローズアップしたのはその例である。次に，この作品の影響から書かれた『創世記』（ド *Genesis*）の 337 行の断片がある。旧約聖書冒頭の天地創造を語ったもので，古英語の

『創世記Ｂ』（*Genesis B*，617 行）の底本に利用されたらしい。ただし，どちらの文献も，キリスト教伝道をザクセン制圧の理念としたフランク王国側の要請による産物である。カロリング・ルネサンス期に発達したラテン文字の小文字に古英語の特殊文字を加えて，古ザクセン語として初めて文字に記された。そのため，古ザクセン語のコイネー（共通語，Koine）で記されたにせよ，古高ドイツ語古フランケン方言からの影響が顕著に見られる。

最も重要な『ヘーリアント』は頭韻を駆使した大規模な作品である。『ゲレフースの黄金の角（＝角杯）』（5.3.）で述べたように，頭韻はアクセントを語頭に固定したゲルマン祖語以来の伝統的な韻律技法だった。しかし，その歩みは北ゲルマン語と西ゲルマン語で別々の道をたどった。次に，両者の歩みを対比させて追ってみよう。

北ゲルマン語では，『エッダ』を典型として，頭韻の技法が長い伝統として受け継がれた。一般に古ゲルマン語詩は，４つの音節（—）と２つの強音部（「′」）を持つ短詩行を行間休止（｜）をはさんで，２つ重ねた長詩行（′— — ′— — ｜′— — ′— —）を単位とする。そして，後半部の短詩行の最初の長音節強音部（′***C***$_1$）を中心に，前半部の短詩行の２強音部を合わせた３度の頭韻（C_1）を踏むパターンが典型的である（′C_1— — ′C_1— — ｜′***C***$_1$— — ′— —）。英語の (as) ***c***ool as a ***c***ucumber「落ち着き払って（＝キュウリのように冷たく）」などの成句や mere ***pr***attle, without ***pr***atice「口先ばっかり，実行さっぱり」（シェイクスピア）のような語呂合わせは，古くは厳格な詩法の一部だったのである。頭韻は，意味的に中核部分を占めることが多い名詞を中心に踏まれた。そのため，この要請を満たすように，古ノルド語の「スカルド詩」では，名詞を名詞句で代用する「キェンニング」（ケニング，ア kenning）や名詞を別の名詞で代用する「ヘイティ」（ア heiti）と呼ばれる技法が発達した。同一詩行中の脚韻や詩行ごとの音節数の交代といった，厳格な制約も課せられるようになった。

こうして形式的に精緻さをきわめた古ノルド語の韻文は，祝典儀礼などで詠（うた）われた「機会詩」（occasional poetry）や感情を吐露する叙情詩などの短い作品に限られ，事跡を延々と物語る叙事詩には発展しなかった。歴史記録か

文学作品かという問題はあるが，他のヨーロッパ諸国とは対照的に，古ノルド語による中世叙事文献が散文によるサガという形を取ったのは，この理由によるとも考えられる。日本の和歌・俳句と物語文学の住み分けにも共通点があろう。和歌や俳句はスカルド詩と同様に長大な物語を生むには至らず，散文文学がその役目を担ったのである。アイスランド語では，20 世紀になっても頭韻が叙情詩に援用され続けた。頭韻技法からの解放は，第二次大戦後の急進的な詩人たちのグループによって実現されたのである[5]。

強い語頭アクセントを保持し，語尾が弱化せずにあいまい母音を欠き，語中や語末の弱母音を脱落させた北ゲルマン語，その中でも保守的な離島北ゲルマン語にたいして，西ゲルマン語は対照的な方向に発達した。語頭アクセントは弱まって文アクセントの比重が高まり，無アクセント接頭辞が発達し，語尾や語中の母音はあいまい母音に弱化して残った。一定数の強音部と頭韻の反復による詩行の韻律的統一性の維持は，弱音節の増加で困難になり，短詩行と長詩行の区別も不明確になった。『ヘーリアント』では代名詞などの機能語でさえ，頭韻を踏んでいる。キェンニングやヘイティによる豊かな比喩表現とは対照的に，意味的に希薄な代名詞的代替表現や枕詞（まくらことば）的な常套句（じょうとうく）を用いた修飾句，同じ意味内容を別の句を用いて反復する同義表現が頻出する。文が長詩行の末尾で完結せず，次行にまたがるアンジャンブマン（フラ enjambement）も見られる。これは装飾表現によって意味的充実をはかることで形式的簡潔さを禁欲的に保持する原則を取らず，叙事文学としての規模を拡大する方向に転じたことを示している。

古高ドイツ語を中心とする内陸ゲルマン語では，カロリング・ルネッサンスによる古代ローマ文化復興の機運の中で，詩行の連続維持のために制約の少ないラテン詩の「脚韻」（rhyme）に切り替えていった。『ヘーリアント』の作者は特定されておらず，その成立は古高ドイツ語地域のフルダの修道院とも，ルーア地方（ルール地方）に位置するヴェルデンの修道院ともいわれて

[5] いわゆる「原子詩人」（ア atómskáld）たちを中心とする一連の現代詩人を指す。清水（2009：249 ff.）参照。

いる。ただし，その作者はフルダの修道院で生まれた古高ドイツ語による『タツィアーン』を知っていたとされている。これは 170 年頃にシリアの聖職者タティアーヌス（Tatianus）が四福音書を総合したラテン語版に基づいて，忠実に古高ドイツ語に移した散文による行間逐語訳である。だとすれば，これに対抗するように，キリスト教精神とゲルマン的世界観を融和させ，ハープの調べに合わせて朗唱する古ゲルマン語の「頭韻詩」（alliterative verse）の伝統を死守するザクセン人としての意欲的な企てを『ヘーリアント』の作者は実践したとも考えられる。しかし，政治情勢に加えて，言語的にもその試みは限界に達しつつあった。やがてヴァイセンブルクの学僧オトフリートによる古高ドイツ語の『福音書』（7.3.）が登場し，本格的な脚韻の時代を迎える。脚韻は続く中高ドイツ語期に語末母音の弱化と弱音節の脱落で踏みやすくなり，主流となった。韻律について中間的性格を示していた古英語でも，11 世紀には脚韻詩が優勢になった。

7．西ゲルマン語 (2) ── 内陸ゲルマン語

7.1. ドイツ語とオランダ語のルーツ ── 古ゲルマン語 3 グループの統合

内陸ゲルマン語の主要な古語は「古高ドイツ語」（ド Althochdeutsch）と「古オランダ語」（オ Oudnederlands）である。ただし，両者は現在のドイツ語とオランダ語と同一ではない。前稿の 3.1. に挙げた表を補足して，西ゲルマン語の発達をまとめてみよう。

エルベ川ゲルマン語
　＞①古高ドイツ語アレマン方言・バイエルン方言など＞［高地ドイツ語子音推移］上部ドイツ語＞ 標準ドイツ語
ヴェーザー・ライン川ゲルマン語
　＞②古高ドイツ語中部フランケン方言など＞［高地ドイツ語子音推移］中部ドイツ語＞ 標準ドイツ語
　＞③古オランダ語古低フランケン方言＞低地フランケン方言＞ 標準オランダ語

北海ゲルマン語
＞古ザクセン語＞④ 低地ドイツ語
＞⑤ オランダ語低地ザクセン方言
＞⑥古フリジア語＞ フリジア語群
＞⑦古英語＞ 英語

すでに述べたように，ドイツ語は①②④に連なる 3 グループの統合から成立した。標準語の母体は「高地ドイツ語」（ド Hochdeutsch）であり，中部高地地方の②「中部ドイツ語」（ド Mitteldeutsch）と南部高地地方の①「上部ドイツ語」（ド Oberdeutsch）という 2 つの方言群を含んでいる。オランダ語も③⑤の 2 グループを起源とし，オランダ北東部エイセル川以南の③「低地フランケン方言」（オ Nederfrankisch）を標準語の母体としている。古オランダ語の別名を「古低フランケン語」（オ Oudnederfrankisch）というのは，このためである。

北海ゲルマン語に属する古ザクセン語は，現在はドイツ語で低地ドイツ語，オランダ語で低地ザクセン方言となって，どちらも方言の地位に甘んじている。一方，ヴェーザー・ライン川ゲルマン語に属するフランケン方言の先駆けは，ともに両言語の標準語に連なっている。標準オランダ語と中部ドイツ語は，たしかに歴史的に近い関係にある。しかし，両者の一方が他方に従属していた時代は存在しない。その間の事情を理解するためにも，「ドイツ」という名称の由来を説明しよう。

そもそも，ド Deutsch［ドイチュ dɔʏtʃ］/オ Duits［㋮㋑ツ dœyts］[6]（< Duitsch）「ドイツ語」とは，「民衆」を意味する名詞の形容詞形である。アイスランド語では，今でも þjóð［スィヨウズ θjou:ð］「民衆」（þ＝th），þýskur［**スィス**クル 'θisgʏr］「民衆の，ドイツ（語）の」/þýska［**スィス**カ 'θisga］「ドイツ語」という。これはラテン語やロマンス諸語にたいする内陸ゲルマン語話者の自称で，中世ラテン語の theodiscus（11 世紀半ば以降は teutonicus）

[6]［㋮㋑］は［ダイ］の口のかまえで唇をまるめるという意味。

として概念を拡張していった。しかも最古の出典地は 786 年のイギリスで，theodisca lingua「民衆の言葉」として古英語を指していた。「ドイツ」の原語は，西ゲルマン語の広範囲を覆っていたのである。ドイツ語圏の母体となったのは，843 年のフランク王国三分割で誕生した東フランク王国，つまりドイツ王国だが，「フランク，フランケン」は「フランス」と同源である。これは現在のフランスに連なる西フランク王国で，frenkisc「フランケン人の」という形容詞が古フランス語話者の自称となったことによる。語源的には，フランス人は自国をゲルマン人部族の国と称していることになる。そこで内陸ゲルマン語話者を表す呼び名が必要になり，theodiscus という名称が使われ始めたというのが一般的な説である。

England「イギリス」が「アングル人の国」，Danmark「デンマーク」が「デーン人の領土」のように部族名に基づく国名であるのに対して，Deutschland［**ドイチュ**ラント 'dɔʏtʃlant］「ドイツ」は「民衆の国」の意味で，実体を欠いている。この語は 1080 年頃の中高ドイツ語による作品『アンノの歌』（ド *Annolied*）で 'in Diutischemi lande'「Diutisch の国で」として初登場し，1 語の複合名詞としては 15 世紀になって現れる。「ドイツ」とは「我々」の意味であり，「我々の言葉•国」といっていたにすぎない。この「我々」が何を指すかは，神聖ローマ帝国（962〜1806）の長期に及んだ群雄割拠時代の後，19 世紀ロマン主義の言語を基盤とする国民国家の理念のもとで，1868 年の明治維新よりも遅れた 1871 年に，北東部の新興国プロイセンを中心としたドイツ帝国として形になった。しかも，それは南東部のオーストリアを除く不完全な国家体制に終わったのである[7]。

オランダ語の由来にも一言しよう。日本語の「ドイツ」は上記のオランダ語の Duits に由来する。一方，「オランダ」はポルトガル語の Olanda による名称で，17 世紀黄金時代の中心地 Holland「ホラント地方」（「森林（hol-< holt）国（land）」の意味）を指し，現在では Nederland［**ネー**デルラント

[7]「オーストリア」（ド Österreich）の原義は「東の（Öster-）国（Reich）」である。ちなみに，「オーストラリア」（Australia）は「南の国」（ラ auster）を原義とする。

ˈneːdərlɑnt］（「低地の（＝海抜が低い neder-）国（land）」の意味」）という。英語ではオランダ語をドイツ語の Deutsch「ドイツ語」と同源の Dutch と呼ぶが，オランダ人も古くは母語を Dietsc（フランドル地方の語形）/Duutsc（ホラント地方の語形）と称していた。その後，Nederduitsch［**ネー**デル㋮㋑ツ ˈneːdərdœyts］，つまり「低地の（neder-）Duitsch の言葉」としてドイツ語と区別した。しかし，17 世紀以降，高地ドイツ語が標準語の地位を固め，北ドイツの言語は「低地ドイツ語」（ド Niederdeutsch［**ニー**ダードイチュ ˈniːdɐdɔʏtʃ］）として方言の地位に下った。その結果，名称の類似性からオランダ語を低地ドイツ語と同一視する誤解が生まれた。それを嫌って，ナポレオン時代以後の政治体制を定めたウィーン会議（1814〜15）で Nederlands［**ネー**デルランス（…ランツ）ˈneːdərlɑn(t)s］に改称したのである。ドイツ語とオランダ語は標準語のレベルではヴェーザー・ライン川ゲルマン語に由来する。しかし，両者はつねに別の言語であり，方言の関係にあった時代は存在しない。オランダは 1648 年の三十年戦争終結まで神聖ローマ帝国の一翼を担っていたが，これは名目的な政治体制にすぎず，言語的にドイツに属していたとはいえない。

7.2.「高地ドイツ語子音推移」とは何か ── 古フランケン方言を 2 分する革新

それでも，オランダ語を低地ドイツ語の一種とする誤記が多いのはなぜだろうか。それは「高地ドイツ語子音推移」（High German Consonant Shift）による区分を過度に重視するためだろう。この音韻変化は，ゲルマン祖語の一部の子音が現在の標準ドイツ語のもとになった南部の古語を中心に起こった。くわしくいうと，エルベ川中流・下流地域からドイツ語圏の南部高地地方に移動したアレマン人，バイエルン人，ランゴバルド人と一部のフランケン人の言語を対象とし，その結果，古高ドイツ語という南部・中部高地地方のグループが形成された。一方，この変化とは無縁の北部低地地方のグループは，ヴェーザー・ライン川ゲルマン語に属する古オランダ語，それに北海ゲルマン語に属する古ザクセン語と古フリジア語，それに古英語のまま残っ

た。古オランダ語の萌芽を文献が残る 900 年頃に先駆けて，600 年頃からとすることがあるが，それは古オランダ語が免れたこの音韻変化の開始時期を根拠としている。「高地ドイツ語子音推移」はそれを受けた南部・中部高地地方の言語を特徴づける現象であり，それとは無関係な北部低地地方の言語をまとめる基準ではない。北海ゲルマン語とヴェーザー・ライン川ゲルマン語を隔てる壁は，別に存在する。標準オランダ語と低地ドイツ語は，どの時代にもひとまとめにはできない。

標準ドイツ語の基盤となった高地ドイツ語は，この音韻変化で他のゲルマン諸語から一線を画する革新的性格を得た。これは最南部から起こり，一部はアルプスに近い最南部で止まり，標準ドイツ語に反映していない変化も含んでいる[8]。「高地ドイツ語子音推移」はとくにライン川周辺の西中部ドイツ語（Westmitteldeutsch）に属する諸方言において，段階的な進行の度合いを示しており，統語線が混み合っている。かつての政治情勢も反映したこの音韻変化による当地の方言区分は，「ライン扇状地」（ライン扇形，ド Rheinischer Fächer）として知られている。

Ⅰ．無声閉鎖音（＞無声有気音）＞無声破擦音・無声摩擦音

ゲルマン祖語は印欧祖語から分岐する過程で，無声閉鎖音 p/t/k を発達させたとされている。この子音はデンマーク語やアイスランド語のような強い有気音を経て（p/t/k＞p^h/t^h/k^h），閉鎖が弱まって無声破擦音または摩擦音になった。t の変化は 5 〜 6 世紀，p の変化は 6 〜 7 世紀，k の変化は 7 〜 8 世紀に継起的に起こったらしい。たとえば，ドイツ語の ***Pf***or***t***e「門」（＜古高ド ***ph***or***t***a）はラテン語 ***p***or***t***a（英 port）の借用だが，t＞{tz，z}/ts/の変化が終了し，p＞{ph，pf}/pf/の変化が起こっていた時期に借用された。このことから，t の変化は p の変化以前の時期に由来することがわかる。南西部の都市名 ***Pf***or***z***heim「プフォルツハイム」は両変化以前の借用による。

[8]「高地ドイツ語子音推移」以降の音韻変化は，推定音を表す「*」をつけずに示す。

(a) 直前に母音がある場合：無声摩擦音（長音＞語末音で短音）に変化

p，t，k(＝c)（＞p^h，t^h，k^h)＞長音　ff /f:/，zz /s:/，hh /x:/＞語末音で「短音化」(shortening) f /f/，z /s/，h，ch /x/)[9]

古高ド o***ff***an「開いた」(ド o***ff***en ['ɔfn̩])↔古英 o***p***en（英 o***p***en)

古高ド e***zz***an「食べる」(ド e***ss***en ['ɛsn̩])↔古英 e***t***an（英 ea***t***)

古高ド a***z***「食べた」(ド a***ß*** [a:s])↔古英 æ***t***（英 a***t***e)

古高ド ma***hh***ōn「作る」(ド ma***ch***en ['maxn̩])↔古英 ma***c***ian（英 ma***k***e)

どの変化も現代の標準ドイツ語に反映しているが，長子音(/f:/, /s:/, /x:/)は失われている。h，ch /x/は語頭で声門摩擦音 /h/，母音間で無音(ド ho***ch*** [ho:x]「高い」(英 high)↔ho***h***e['ho:ə]「同左(変化形)」)，硬口蓋音の前で硬口蓋摩擦音 /ç/（例．i***ch*** [イヒ ɪç]「私」↔a***ch*** [アハ ax]）になった。t (＞t^h)＞zz [s:]＞z [s] の変化の結果は，現代ドイツ語では ss [s]，長母音と二重母音の後で ß [s] と表記する。ß（＜sz)「エスツェト」の文字は z，tz [ts] と区別して，母音に続く t に由来する無声音 [s] を表す。古来の s /z/ は音節末で無声化して [s] と発音する(例．wei***s***e['vaɪzə]「賢い」→ Wei***s***heit ['vaɪshaɪt]「知恵」)。上記の変化の結果，ドイツ語では有声の s[z]（＜ゲ s）と無声の ss，ß [s]（＜ゲ t）の対立が生まれた（例．wei***s***e ['vaɪzə]「賢い」(英 wi***s***e)↔wei***ß***e['vaɪsə]「白い(変化形)」(英 whi***t***e))。十の位を表す数詞は zwan***z***ig「20」(英 twen***t***y）のように -***z***ig [ツィヒ tsɪç] だが，母音に後続する drei***ß***ig「30」(英 thir***t***y）だけが -***ß***ig [スィヒ sɪç] となるのはこのためである。

[9] ドイツ語の古語では z は [ズ z] ではなく，[ス s] または [ツ ts] を表す。現代ドイツ語ではつねに [ツ ts] を表す。同じく，ch は [チ tʃ] ではなく，軟口蓋無声摩擦音 [ハ x] または硬口蓋無声摩擦音 [ヒ ç] を表す。

(b) 直前に母音がない場合：無声破擦音（＞一部で摩擦音）に変化

p，t，k(＝c)（＞p^h，t^h，k^h)＞ph，pf /pf/，tz，z(z) /ts/，(k)ch /kx/

① t(＞t^h)＞z(z)，tz /ts/: 高地ドイツ語全域；標準ドイツ語に反映している

② p(＞p^h)＞ph，pf /pf/: 上部ドイツ語(バイエルン方言，アレマン方言，東フランケン方言）のみ；標準ドイツ語に反映している

③ k（＞k^h)＞(k)ch /kx/: 最南部の上部ドイツ語（アレマン方言とバイエルン方言）のみ；標準ドイツ語にはほとんど反映していない

(i) 語頭

古高ド ***ph***und「ポンド(重量の単位)」（ド ***Pf***und[pfʊnt])↔古英 ***p***und（英 ***p***ound）

古高ド ***z***ehan「10」（ド ***z***ehn [tse:n])↔古英 ***t***īen（英 ***t***en）

古高ド ***k***orn，***ch***orn「粒，穀物」（ド ***K***orn [kɔʁn])↔古英 ***c***orn（英 ***c***orn）

(ii) 子音の直後

古高ド kam***ph***，cham***pf***「戦い」（ド Kam***pf*** [kampf])↔古英 com***p***「野営地，戦い」（＜ラ cam***p***us，英 cam***p***）

古高ド her***z***a「心臓」（ド Her***z*** [hɛʁts])↔古英 heor***t***e（英 hear***t***）

古高ド wer***k***，wer***ch***「仕事」（ド Wer***k*** [vɛʁk])↔古英 wer(o)r***c***（英 wor***k***）

鳴音 m/n/l/r の後ではさらに無声摩擦音 f/s/ch になることがあった。

古高ド hel***ph***an，hel***f***an「助ける」（ド hel***f***en ['hɛlfn̩])↔古英 hel***p***an（英 hel***p***）

古高ド thor***ph***，dor***f***「村」（ド Dor***f*** [dɔʁf])↔古英 þor***p***（英 thor***p***）

有気音化が起こりにくい sp，st，sk，ft，ht; tr の連続では，閉鎖音のままで変化しなかった（後に sp/st/sk＞ド sp [ʃp]/st [ʃt]/sch [ʃ] のように，s が [ʃ] になった)。

古高ド s***t***erno, s***t***erro「星」(ド S***t***ern[ʃtɛʁn])↔古英 s***t***eorra(英 s***t***ar)

(iii) 長子音　pp/tt/kk

長子音に由来するかの判断は，現代語からは困難なことが多い。次の最後の 2 例は「西ゲルマン語子音重複」を経て長子音になった（Cj>C̄）。

古高ド za***ph***o「樽の栓」（ド Za***pf***en［'tsapfn̩］）↔古英 tæ***pp***a（<ゲ *ta***pp**ōn，英 ta***p***）

古高ド se***zz***en「置く」（ド se***tz***en［'zɛtsn̩］）↔古英 se***tt***an（<ゲ *sa***t-*** ***j***anan，英 set）

古高ド we***ck***en「起こす」（ド we***ck***en［'vɛkŋ̩］）↔古英 we***ċċ***an（<ゲ *wa***kj***anan，英 wa***k***e）

以上の（a）（b）の変化の原因には定説がない。ひと昔前には，「南の方はアルプスが近くて坂が多いので，歩くのも大変でハーハーと息を出すから，［プフ，クフ，ツ，フ］と言うようになった」などという説が大まじめに唱えられたこともある。

II．有声（摩擦音>）閉鎖音の無声化（ 8 ～ 9 世紀）

標準ドイツ語に反映されているのは，①の変化だけである。②③の変化は最南部でしか起こっていない。「（摩擦音>）閉鎖音」の変化は「ゲルマン語子音推移」に関連する現象である。

① (đ /ð/>)d /d/>t:　上部ドイツ語と中部ドイツ語の一部

古高ド ***t***iofo「深い」（ド ***t***ief［ti:f］）↔古英 ***d***ēop（英 ***d***eep）

② (ƀ>/v/>)b /b/>p:　バイエルン方言とアレマン方言のみ

古高ド ***b***ruoder，***p***ruoder「兄弟」（ド ***B***ruder['bru:dɐ］）↔古英 ***b***rōþor（英 ***b***rother）

③ (g /ɣ/>)g /g/>k:　おもにバイエルン方言

古高ド ***g***ot，***k***ot「神」（ド ***G***ott［gɔt］）↔古英 ***g***od（英 ***g***od）

以上の事実とは別に，II．(đ /ð/>)d /d/>t の変化によって d /d/が消失したのを補うように，þ(=th)/θ/>d /d/の変化が 8 ～ 9 世紀に起こった(例.

古高ド ***d***ankōn「感謝する」(ド ***d***anken)↔古英 ***þ***ancian(英 ***th***ank))。ただし，これは少なくとも文字に現れた限り，古ザクセン語（***th***ankōn）を除いて，低地ドイツ語とオランダ語（***d***anken）とも共通しており，「高地ドイツ語子音推移」とは別の扱いを必要とする。þ /θ/を保ったアイスランド語（***þ***akka）を除いて，北ゲルマン語（フェ・ニュ ***t***akka，ス ***t***acka，ブ・デ ***t***akke)とフリジア語群(西フ ***t***ankje，北フ ***t***unke，***t***oonke，東フ ***t***onkje）では，þ(＝th) /θ/は無声閉鎖音 t（デンマーク語では有気音［tʰ］）に変わった。

さて，ここで，すでに「ゲルマン語子音推移」の章で述べたこの音韻法則の新しい解釈に関連して，「高地ドイツ語子音推移」を含む「グリムの法則」にたいするフェネマンの異議申し立ての続きを紹介しておこう。「高地ドイツ語子音推移」は「ゲルマン語子音推移」，すなわち「第一次子音推移」と関連づけて，「第二次子音推移」(Second Consonant Shift）とも呼ばれている。フェネマンは「ゲルマン語子音推移」すなわち「第一次子音推移」だけでなく，これについても再考が必要であるとした。

そもそも，両者には相違点が多い。まず，「高地ドイツ語子音推移」は「Ⅰ．無声閉鎖音」と「II．有声摩擦音およびそれから転じた有声閉鎖音」にしか起こっていない。無声閉鎖音 p，t，k は「ゲルマン語子音推移」では無声摩擦音 f /f/, þ /θ/, ***χ*** /x/になったが，「高地ドイツ語子音推移」では無声破擦音 ph，pf /pf/; tz，z(z) /ts/; (k)ch /kx/と摩擦音の長音 ff /f:/，zz /s:/，hh /x:/に変わっている。なぜ同じ変化が別の結果を生むのか。「高地ドイツ語子音推移」は閉鎖音の位置と種類によっても，変化の程度に差が激しい。また，無声閉鎖音は有気音/pʰ/, /tʰ/, /kʰ/を経て破擦音化したとされるので，最も有気音が強いはずの語頭でこそ，破擦音化した地域が最も広いはずである。ところが，実際には最も狭い地域でしか起こっていない（例．①軟口蓋音：語頭 ***k***orn「粒，穀物」>最南部の上部ドイツ語のみ ***ch***orn↔語中 ma***k***en「つくる」>中部・上部ドイツ語ともに ma***ch***en；②両唇音：語頭 **p**und「ポンド（重量の単位）」>上部ドイツ語のみ ***pf***und↔語末 dor***p***「村」>中部・上部ドイツ語ともに dor***pf***>dor***f***, 12. 1.)。これはなぜだろうか。語

形変化や母音が保守的な高地ドイツ語で，障害音だけが革新的なのは偶然なのか。

フェネマンは 1984 年に，「ゲルマン語子音推移」と「高地ドイツ語子音推移」という 2 度の音韻変化を想定する古典的解釈を否定する大胆な説を提唱した。まず，「ゲルマン語子音推移」の章で述べたガムクレリゼとイヴァーノフの声門化音説に沿って，歯(茎)音で代表させると，最初期のゲルマン祖語の障害音系列を/θ/-/t/-/ð/から印欧祖語と本質的に変わらない/tʰ/-/t'/-/d̥/とした。/tʰ/は無声有気閉鎖音，/t'/は放出音（声門化無声閉鎖音），/d̥/は調音の度合いが弱く有声性が高い軟音閉鎖音を示す。そして，「古ゲルマン祖語」（Paleo-Germanic）という最初期の段階を想定し，「ゲルマン祖語」（Proto-Germanic）に移行する「無声有気閉鎖音（/tʰ/）＞無声摩擦音（/θ/）」の変化があったとして，これを「ゲルマン祖語子音推移」（Proto-Germanic Consonant Shift）と名づけた。時期的には「ヴェアナーの法則」以後とみなされる。

そして，古ゲルマン語圏最南部の古高ドイツ語アレマン方言とバイエルン方言，最北部の古アイスランド語の資料に基づき，ゲルマン祖語の放出音/t'/は「ゲルマン語内部子音推移」（Innergermanic Consonant Shift）という 1 度の音韻変化で，前者では破擦音化し（/t'/＞/ts/（＞摩擦音 /s:/＞短音 /s/)），後者では有気音化した(/t'/＞/tʰ/）とみなした。前者はアルプス寄りの「高地ゲルマン語」（High Germanic）の典型例，後者は北海，バルト海，黒海寄りの「低地ゲルマン語」（Low Germanic）の典型例で，この変化を端的に示している。中間に位置する残りの古高ドイツ語の上部・中部方言は「高地ゲルマン語」の特徴，古ザクセン語，古オランダ語，古フリジア語，古英語，ゴート語，残りの古ノルド語は「低地ゲルマン語」の特徴を漸次的に示すという。現在でもアイスランド語，フェーロー語，デンマーク語の閉鎖音は「無声 /t/↔有声 /d/」ではなく，「有気 /tʰ/↔無気 /d̥/」の対立であり，南部のドイツ語の閉鎖音は無気音である[10]。従来の「継起説」（succession theory）というべき古典的解釈にたいして，これを「分岐説」（bifurcation

[10] オランダ語の無声閉鎖音も，隣接するフランス語と同様に無気音である。

theory）という。J.グリム式の「第一次，第二次」という循環論法は虚構であることになる。

フェネマンはまた，上述のように，古典的解釈による印欧祖語の有声有気閉鎖音（dʰ）から生じた有声摩擦音の閉鎖音化（đ /ð/＞d /d/）を排除し，調音の度合いが弱い半有声の軟音閉鎖音（/d̬/）をゲルマン祖語に想定した。そして，「高地ゲルマン語」では閉鎖の度合いが強まる硬音化に伴う無声化（/d̬/＞/t/），「低地ゲルマン語」では有声化と摩擦音化（/d̬/＞/d/，/ð/）が強まったとした。これで，「摩擦音＞閉鎖音」という類型論的に不自然な変化は不要になる。また，「ゲルマン祖語子音推移」による無声摩擦音（/θ/）は，「高地ゲルマン語」では軟音化（/θ/＞/ð̬/），「低地ゲルマン語」では有声化（/θ/＞/ð/）が強まったとした。

(a) ゲルマン祖語子音推移 /tʰ/-/t'/-/d̬/＞/θ/-/t'/-/d̬/
古ゲルマン祖語：無声有気閉鎖音 /tʰ/
＞ゲルマン祖語：無声摩擦音 /θ/
(b) ゲルマン語内部子音推移 /θ/-/t'/-/d̬/＞/θ/-①/ts/↔②/tʰ/-/d̬/
ゲルマン祖語：放出音（声門化無声閉鎖音）/t'/
＞① 高地ゲルマン語：無声破擦音 /ts/（＞摩擦音 /s:/＞短音 /s/）
＞② 低地ゲルマン語：無声有気閉鎖音 /tʰ/
(c) 高地ゲルマン語・低地ゲルマン語内部の傾向
① 高地ゲルマン語 /θ/-/ts/-/d̬/＞/θ/(＞/ð̬/)-/ts/-/d̬/(＞/t/)
軟音閉鎖音 /d̬/＞硬音 /t/
無声摩擦音 /θ/＞軟音 /ð̬/
② 低地ゲルマン語 /θ/-/tʰ/-/d̬/＞/θ/(＞/ð/)-/tʰ/-/d̬/(＞/d/＞/ð/)
軟音閉鎖音 /d̬/＞有声音 /d/＞摩擦音 /ð/
無声摩擦音 /θ/＞有声音 /ð/

従来の古典的解釈では，「高地ドイツ語子音推移」はドイツ語圏の南部高地地方で発祥し，中部高地地方にもかなり浸透し，北部低地地方で途絶えたと

されている[11]。ただし，ドイツ語圏中部の中部フランケン方言でも独自に生じたとする説[12]，ドイツ語圏中部ではフランク王国の言語同化政策でこの変化を取り入れ，上層階級から下層階級に広がったとする説もある[13]。この点についても，フェネマンは「高地ゲルマン語」の地域で発祥した破擦音化は，北上するにつれて弱まったのではなく，政治的に優位に立つフランケン人の「低地ゲルマン語」から抵抗を受けて，部分的に後退したとみなしている。これは音韻変化は政治的・文化的中心地から発祥して周囲に及ぶという「方言周圏論」と共通点がある。さらに，古典的解釈による古高ドイツ語の「摩擦音＞破擦音」の変化（Ⅰ．(a)，(b) ①〜③）についても，５〜８世紀とする通説とは異なり，伝統的な「ゲルマン語子音推移」と同じほど古い時代の紀元前３世紀以前に始まったと推定している。フェネマンの説はグリムとは別の理想化を含み，反論もあるが，印欧祖語の声門化音説の是非は別にしても，示唆に富む点が多く，類書で言及されている。

7.3. 古高ドイツ語 ── フランケン人，アレマン人，バイエルン人

古高ドイツ語は現代標準ドイツ語に連なる中・南部の諸方言の先駆けであり，エルベ川ゲルマン語から生じた上部ドイツ語とヴェーザー・ライン川ゲルマン語から生じた中部ドイツ語からなっている。

前者の代表は「アレマン人」（ド Alemannen）の古アレマン方言と「バイエルン人」（ド Bayern/Baiern）の古バイエルン方言である。アレマン人はスエービー族を中心とする部族で，ドイツ南西部の「シュヴァーベン地方」（ド Schwaben）に名を残し，タキトゥスの『ゲルマーニア』にも言及がある。バイエルン人は５世紀後半に文献に現れ，東側のオーストリアに拡大した。ほかにも，エルベ川中流地域の「テューリンゲン人」（ド Thüringer）[14]，それに

[11] フリングス（Theodor Frings 1886〜1968）を中心とする説。
[12] シュツアイヒェル（Rudolf Schützeichel）による説。
[13] レルヒナー（Gotthard Lerchner）による説で，「音韻置換説」（ド Lautersatz）という。
[14] テューリンゲン地方のドイツ語方言は，今日では中部ドイツ語に属する。

568 年にイタリアに王国を建て，北イタリアの「ロンバルディア州」（イタ Lombardia）に名を残す「ランゴバルド人」（ド Langobarden）がいたが，原典としてのまとまった文献は残っていない。

一方，ヴェーザー・ライン川ゲルマン語の代表はフランケン人（ド Franken）とヘッセン人（ド Hessen）である。その言語は「古フランケン方言」と呼ばれ，中心部分は中部ドイツ語に連なるが，それ以外にも下位分類される大方言群を形成している。前述のように，「高地ドイツ語子音推移」を免れた古低フランケン方言は，現在の標準オランダ語の基盤となった。一方，ロマンティック街道の起点として有名な古都ヴュルツブルク（ド Würzburg）周辺の「古東フランケン方言」は，現在で東フランケン方言として上部ドイツ語に属し，中部ドイツ語の特徴を兼ね備えている。

フランケン人（「自由・勇敢な人々」が原義）は 240 年頃に文献に現れる。476 年の西ローマ帝国滅亡後はオランダ中部・西部とドイツ中西部から勢力を拡大し，テューリンゲン地方 (531 年)，ブルグント王国 (534 年)，アレマン人 (746 年) とバイエルン人 (794 年) の領地を支配下におさめ，最後にザクセン人 (804 年) を隷属させて強盛を誇った。メロヴィング朝 (482〜751) からカロリング朝 (751〜843) にかけて，フランク王国はローマカトリックのキリスト教精神を唯一継承し，5 世紀半ばのフン族の東欧侵攻，7 世紀初頭のイスラム勢力のイベリア半島進出など，中世初期の混乱期に軍事的にもこれを擁護した。

メロヴィング朝の創始者クロートヴィヒ（ド Chlodwig，フラ Clovis「クローヴィス」，466 頃〜511）はガリアの大部分を支配し，496 年にカトリックに改宗した。8 世紀にはアングロサクソン人の聖ボニファーティウス (Bonifatius 675？〜754) の努力でキリスト教がフランク王国のドイツ人に広まり，744 年にはドイツ中部のフルダ (ド Fulda) に修道院が置かれた。古高ドイツ語文献は修道院の書房で成立したが，フルダの修道院は 9 世紀に重要な拠点となった。800 年には，カロリング朝のカール大帝（ド Karl der Große，フラ Charlemagne「シャルルマーニュ」742〜814，在位 768〜814）がローマ帝国の後継者として，教皇から戴冠を受けた。

しかし，「カロリング・ルネサンス」と称えられるカール大帝の古高ドイツ語による文芸奨励を伝える遺産は多くない。とくに異教的内容のゲルマン英雄歌謡文献は，キリスト教布教の障害として，「敬虔王」の愛称で知られる息子のルートヴィヒ１世（Ludwig I. 778〜840）が処分してしまったらしい。じつにもったいない話である。その代わり，キリスト教文学は 9 世紀に大作を生んだ。ラテン語版総合福音書の忠実な「行間逐語訳」（interlinear translation）による散文訳『タツィアーン』（ド *Tatian* 830 頃），名前が知られた最古のドイツの詩人である学僧オトフリート（Otfrid 800 頃〜875 頃）よる韻文自由訳『福音書』（ド *Evangelienbuch* 870 頃）が双璧である。前者はフルダの修道院で古東フランケン方言によって記された。後者は現在はフランス領に属するアルザス地方（フラ Alsace，ド Elsass「エルザス」）のヴァイセンブルク（ド Weißenburg，フラ Wissembourg「ヴィサンブール」）の修道院で，古南ラインフランケン方言によってまとめられ，最初の組織的な脚韻詩を試みとして名高い。上述の古ザクセン語による『ヘーリアント』と『創世記』も，このジャンルに入る。ほかには，最後の審判を描いた「世界の終末」の意味の頭韻詩『ムースピリ』（ド *Muspilli* 9 世紀後半，103 行，バイエルン方言），決闘を挑まれた父親が息子を無念のうちに倒すという悲劇的な筋書きのゲルマン的叙事詩『ヒルデブラントの歌』（ド *Hildebrandslied* 最終部欠落，9 世紀初，68 行）など，小規模の作品にとどまる。後者はフルダの修道院で成立し，古東フランケン方言に他の古高ドイツ語方言や古ザクセン語の要素も加えた混成的な翻訳である。

古高ドイツ語は便宜的に『タツィアーン』の古東フランケン方言を標準とはするが，中心的方言を欠いている。しかも，東フランク王国を経てカロリング朝からザクセン朝（919〜1024）に転じ，神聖ローマ帝国を築いたオットー大帝（ド Otto der Große 912〜973）の時代には，キリスト教的ラテン語文化の色彩が鮮明になった。10 世紀の文献は乏しい。唯一の例外は，スイスの世界遺産ザンクト・ガレン（ド St. Gallen）の修道院に仕えたノートカー（Notker 950 頃〜1022）によるボエーティウス（Boethius 480 頃〜524 頃）などのラテン語著作の古アレマン方言への翻訳である。古高ドイツ語は 750

年頃にフライジング（ド Freising）の修道院で編まれたラテン語・古バイエルン方言の対訳語彙集『アブロガンス』（*Abrogans*，「謙虚な」を意味する最初の語彙による名称，約 3,670 語）に始まり，11 世紀初頭に最南端の地で最後の輝きを見た。以後，ホーエンシュタウフェン王朝（ド Hohenstaufen 1138〜1254）の隆盛期にあたる 1190〜1250 年の中高ドイツ語古典期に，新文化を担った騎士階級が宮廷叙事詩，英雄叙事詩，ミンネザング（ド Minnesang，恋愛叙情詩）として世俗的な宮廷文学の華を開かせるに至る。

7.4. 古オランダ語 ──『ヴァハテンドンク詩篇』とその周辺

オランダ語圏はフランク王国分裂後，843 年のヴェルダン条約で中フランク王国（ド Lothringen「ロートリンゲン」）の一部となった。これはフランスの原型である西フランク王国とドイツ語圏を中心とする東フランク王国にはさまれ，北海沿岸から北イタリアに伸びる細長い領土だった。しかし，870 年のメルセン条約で東・西フランク王国に分割・併合され，現在のオランダは東フランク王国，一方，ベルギー北部のフランドル地方は西フランク王国にほぼ分かれた。880 年のリブモン条約ではマース川（オ Maas）以東が東フランク王国，つまりドイツ王国に帰属した。9〜10 世紀にはフランス王ないしドイツ皇帝に帰属し，フランドル，ブラーバント，ホラントの伯爵領やリエージュ（フラ Liège，オ Luik「ライク」），ユトレヒト（ユートレヘト，オ Utrecht）の司教座が勢力を拡張した。

古オランダ語の文献は，キリスト教伝来が遅れ，過疎地だったこともあって，あまり多くない。その代表は『ヴァハテンドンク詩篇』（オ *Wachtendonckse Psalmen*）である。これは旧約聖書の詩篇の一部（1.1〜3.6，18，53.7〜73.9）を中心に，ラテン語原典に 1 行ごとに忠実に翻訳を施した行間逐語訳である。カール大帝が都としたドイツ中西部のアーヘン（ド Aachen）に近いオランダ南東部のマーストリヒト（オ Maastricht）周辺のリンブルフ地方（オ Limburg）で，10 世紀初め頃に成立したと推定されている。それ以前は，700 年頃からラテン語文献に散発的に挿入された固有名詞しか残っていない。「ヴァハテンドンク」（Wachtendonck）とは，ベルギー南東部の古都リエー

ジュの教会職員アルノルト・ヴァハテンドンク（Arnold Wachtendonck）の名前である。この人物から 1598 年にフランドル人学者リプシウス（Justus Lipsius 1547〜1606）が譲り受けたとされる原本は失われ，リプシウスによる 2 種類のラテン語との対訳語彙集，それに時代と場所が異なる 4 資料を総合して復元されている。最初の数詩篇は古中部フランケン方言に酷似しており，古中部フランケン方言から残りの大部分を古オランダ語，すなわち古低フランケン方言に翻訳したという説が有力である。

もうひとつの文献は，『エヘモントのヴィリラム雅歌注解』（オ *Egmondse Williram*）である。古高ドイツ語東フランケン方言からの翻訳で，北ホラント地方のエヘモント（オ Egmond）の修道院で 11 世紀末に書かれ，羊皮紙 60 葉，約 9,500 語からなる。ただし，語彙や語形変化は古低フランケン方言に直してあるが，「高地ドイツ語子音推移」を踏襲しているので，古高ドイツ語のような印象を受ける。

『ヴァハテンドンク詩篇』を生んだリンブルフ地方は，ドイツ語圏と関係が深い。それは中期オランダ語（オ Middelnederlands 1200〜1550）の初期の宮廷叙事詩人で，ミンネザングも残したヘンドリク・ヴァン・ヴェルデケ（Hendrik van Veldeke，ドイツ語名「ハインリヒ・フォン・フェルデケ」（Heinrich von Veldeke，1140 頃〜1200 頃）の作品の言語の母体でもある。ただし，中期オランダ語の中心地は，現在のベルギー北西部の東・西フランドル 2 州に移った。日本では未紹介の中期オランダ語は，中高ドイツ語に匹敵する文学作品の宝庫であり，研究が待たれる。中世後期の中心地は北側のブラーバント地方に移り，16 世紀にはスペイン軍による南ネーデルラント，すなわち現在のフランドル地方への侵攻の結果，さらに北側のアムステルダム（オ Amsterdam）を中心とするホラント地方に移動した。

フランドル方言による古語の資料は，中期オランダ語文学の隆盛期以前の古オランダ語時代には，きわめて限られている。古西フランドル方言による唯一の資料を紹介しよう。羊皮紙の余白に記されたラテン語との対訳による 11 世紀後半の恋歌で，当時，関係が深かったイギリス南東部のロチェスター（Rochester）の大修道院で発見された。オランダでは若者向きのＴシャツの

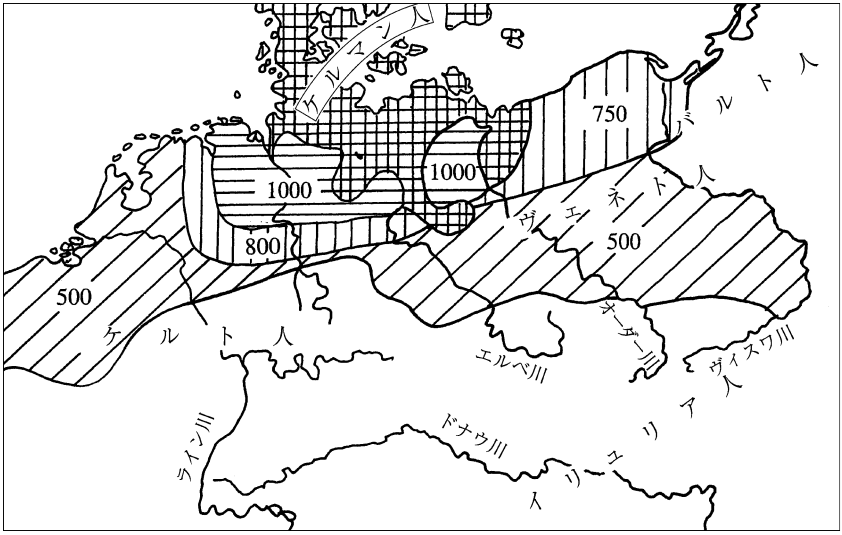
図柄にもなっている[15]。なんとも粋なファッションではないか。

ラ　Quid expectamus nunc?　Abent omnes volucres nidos inceptos nisi ego et tu

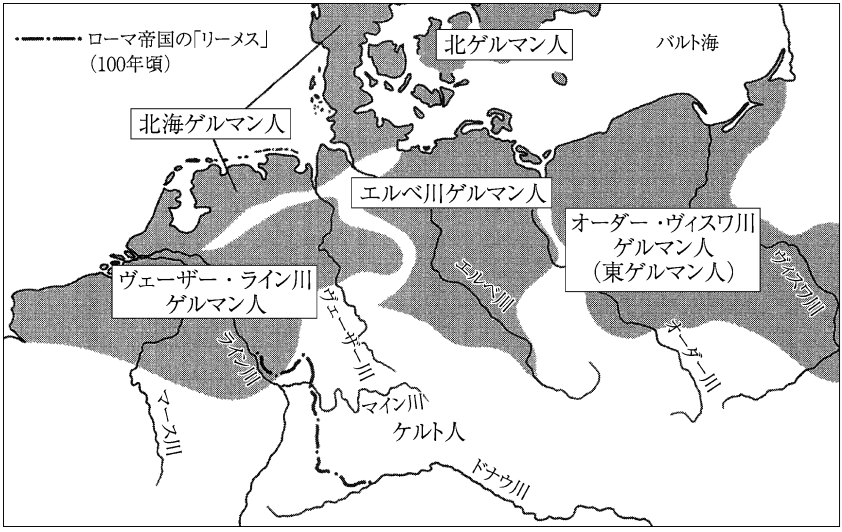
古オ　Hebban olla uogala nestas hagunnan hinase hi(c) anda thu uu(at) unbida(n) (uu)e nu「すべての（olla，英 all）鳥たちも（uogala，英 fowls）私（hi(c)，英 I）と（enda）あなた（thu，英 thou）を除いて（hinase）巣を（nestas，英 nests）作り始めたのですから（hebban... hagunnan，英 have...begun），私たちは（(uu)e，英 we）今さら（nu，英 now）何を（uu(at)，英 what）待っているのでしょうか（unbida(n)，英 bide）」

[15] カッコ内の文字は判読不能のため，推定で再現している。Quak/Van der Horst (2002：27) 参照。

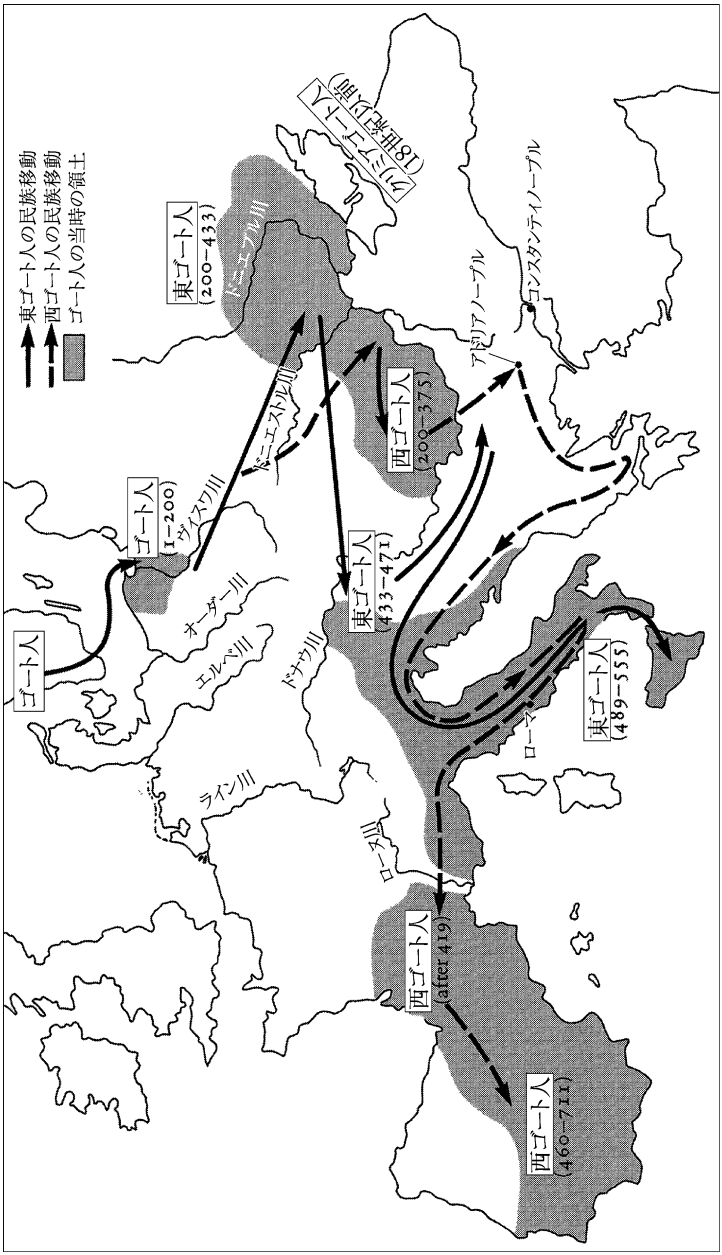
＊関連地図一覧（「ゲルマン語の歴史と構造 (1)〜(4)」）



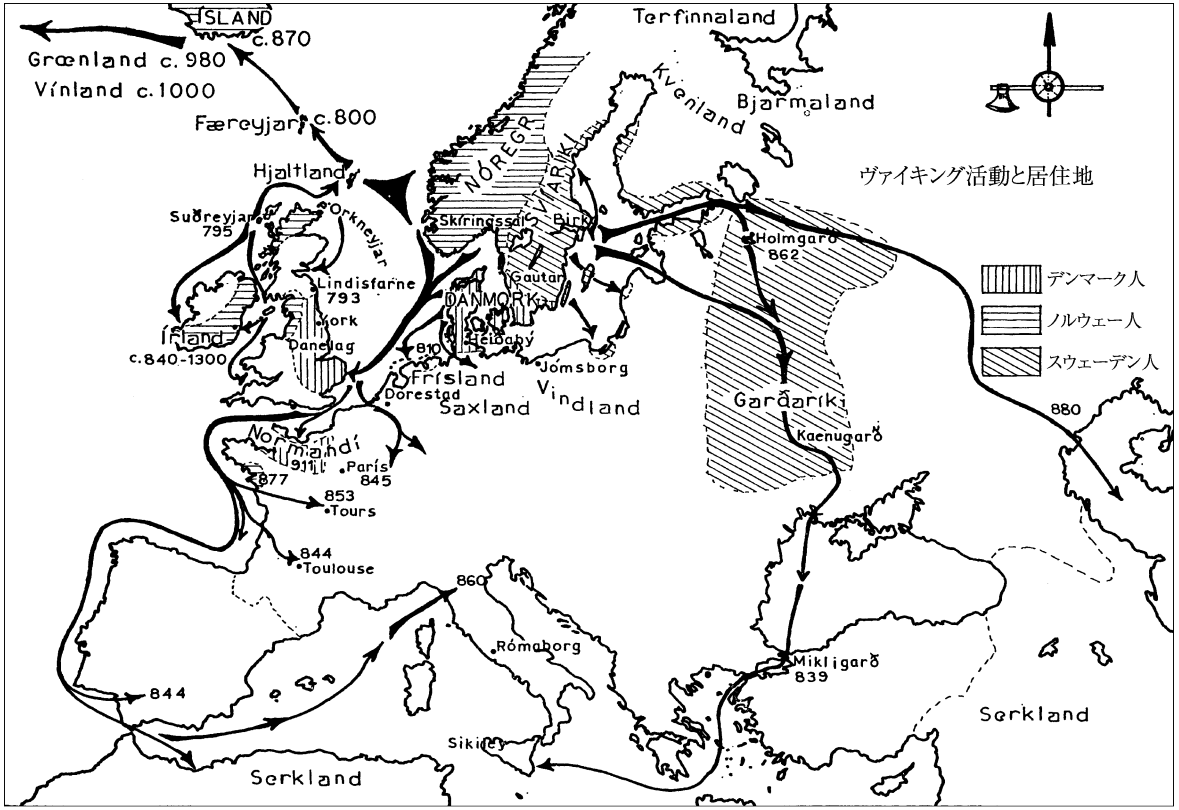
地図 1　紀元前 1000〜500 年頃のゲルマン人の居住地域
（Schwarz（1956：36）をもとに作成）



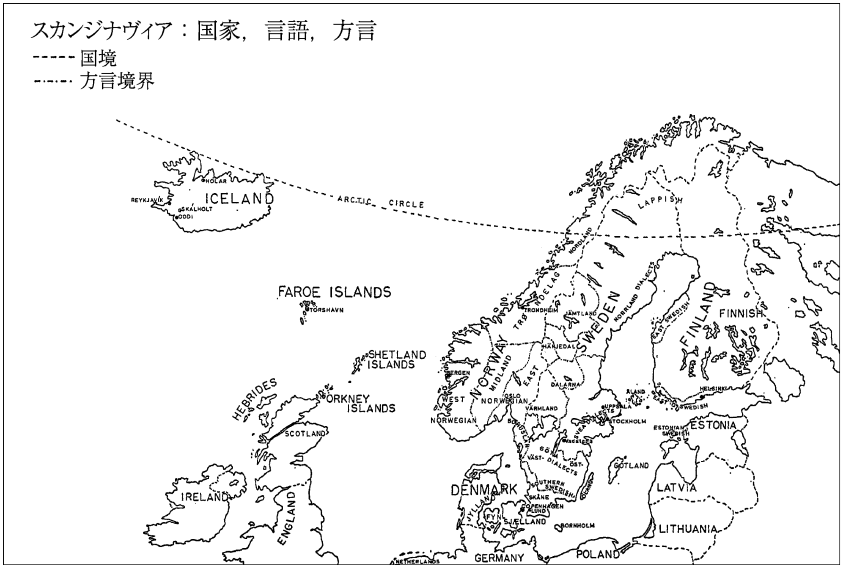
地図 2　ゲルマン人の 5 分類と居住地域（紀元前 3 世紀頃）
（Frings（1957[3]：146），Robinson（1992：17）をもとに作成）



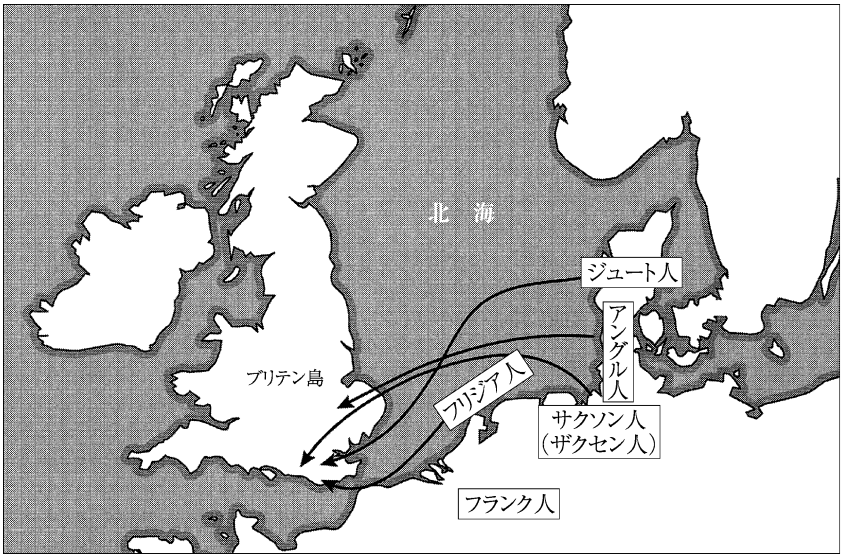
地図 3　ゴート人の民族移動（1 ～ 8 世紀）
(Schwarz (1956：84) をもとに作成)



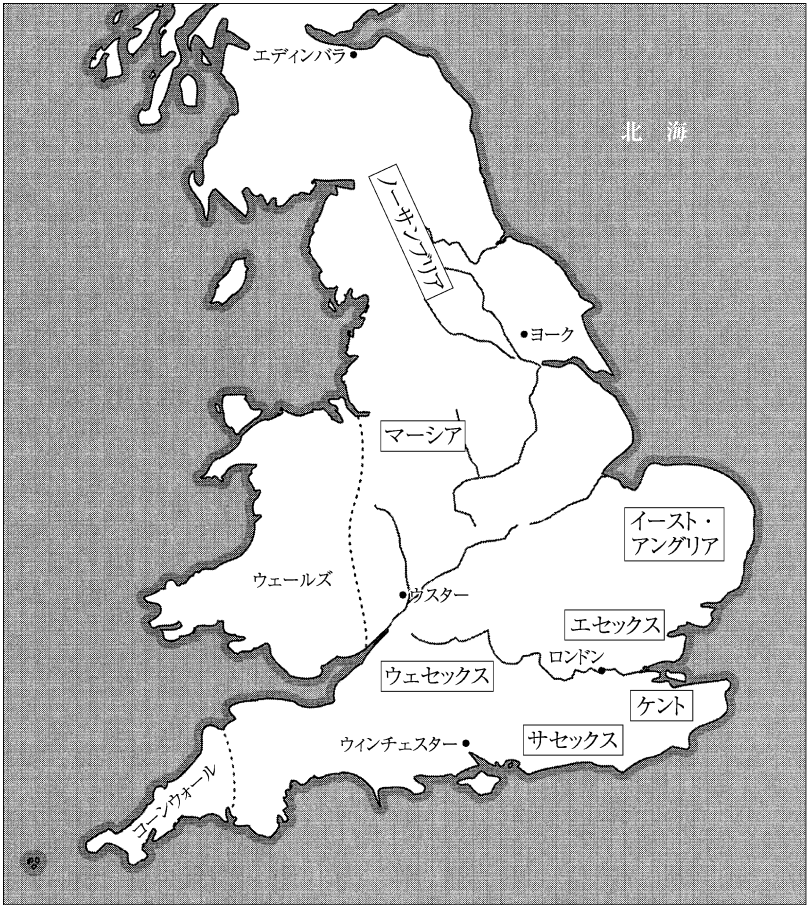
地図 4　ヴァイキング活動と北ゲルマン語の拡大（Haugen（1984：172）をもとに作成）



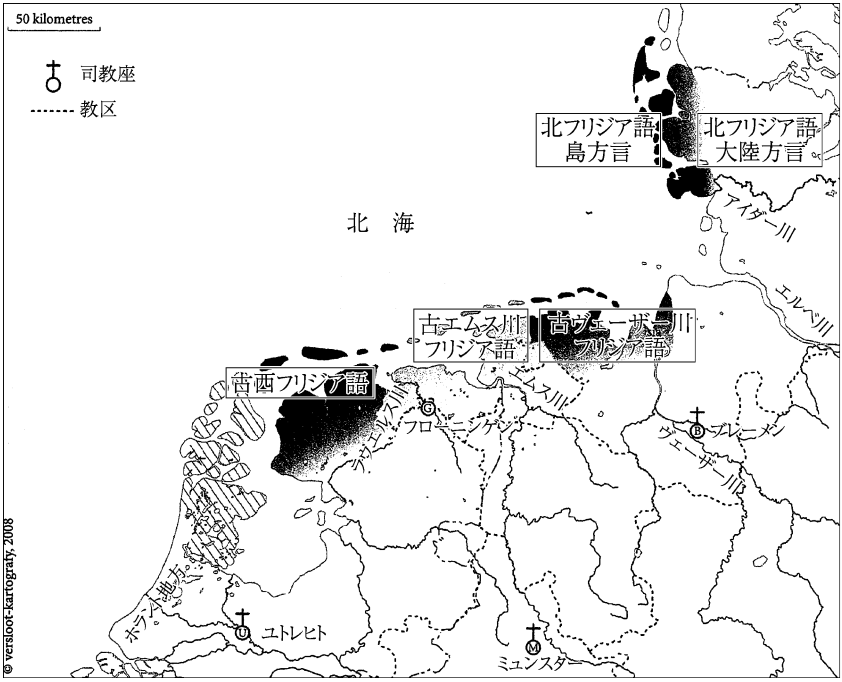
地図 5　北ゲルマン語の使用地域（Haugen（1976：26）をもとに作成）



地図 6　ゲルマン民族のブリテン島移住（Millward（1996²：78）をもとに作成）

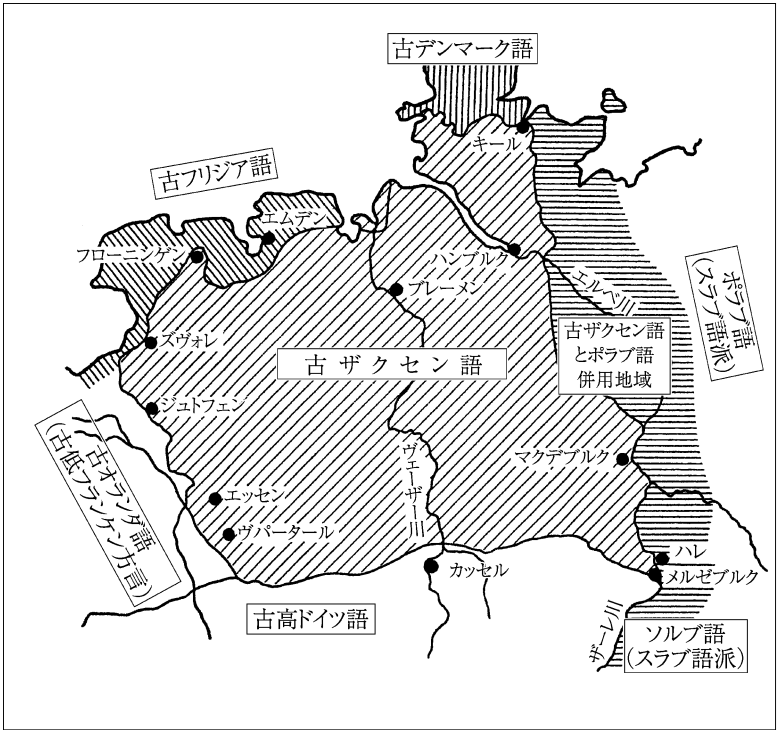


地図 7　アングロサクソン七王国（Millward（1996²：79）をもとに作成）



地図 8　古フリジア語の使用地域（1300 年頃）

（Bremmer 2009：110）をもとに作成）

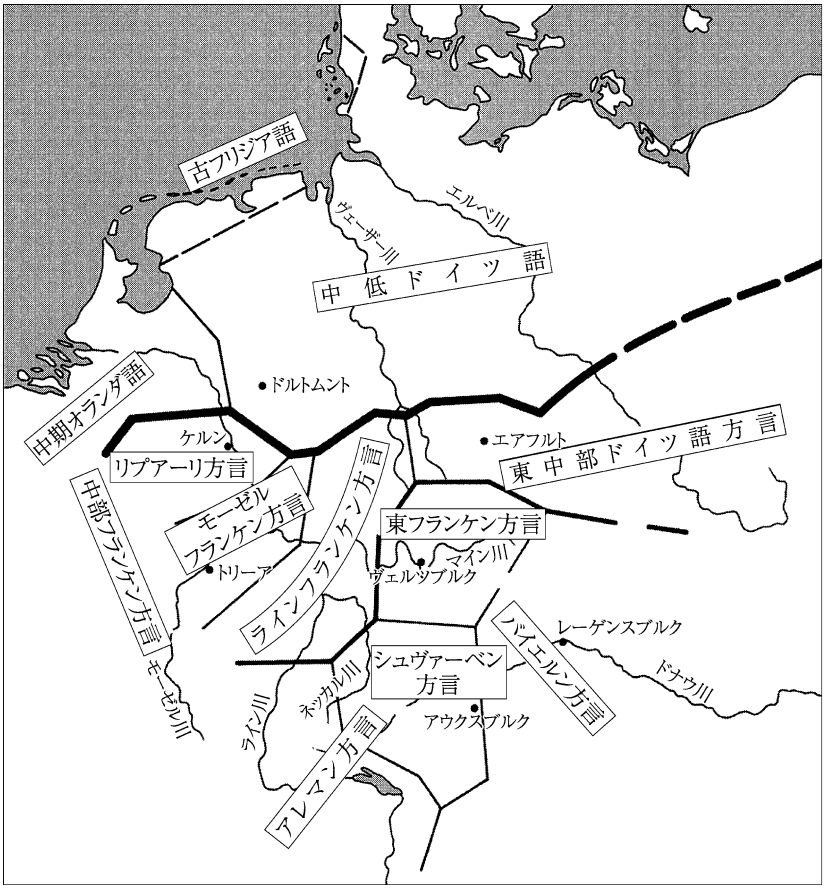


地図 9　古ザクセン語の使用地域（ 9 世紀）

（Lockwood 1976：39）をもとに作成）

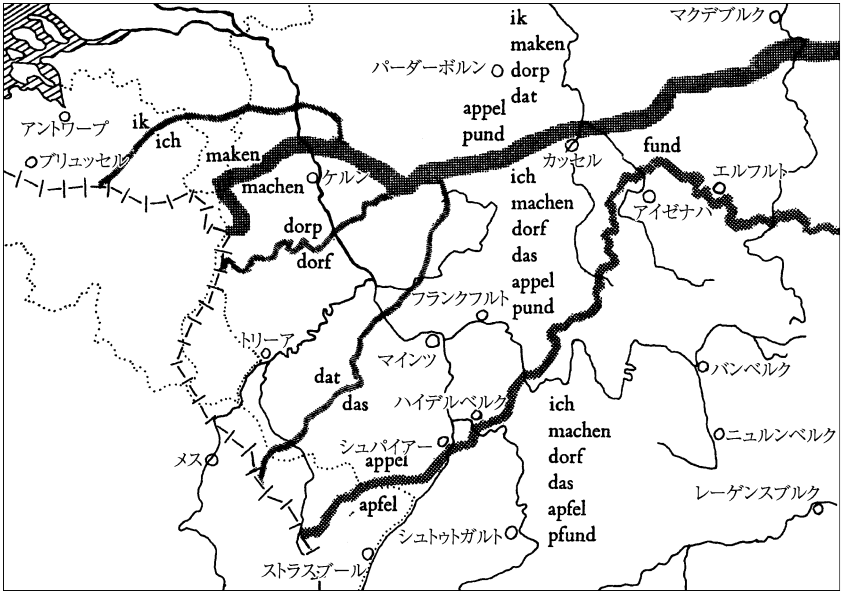
地図 10　低地ドイツ語の使用地域

（Sanders（1982）の巻末地図をもとに作成）



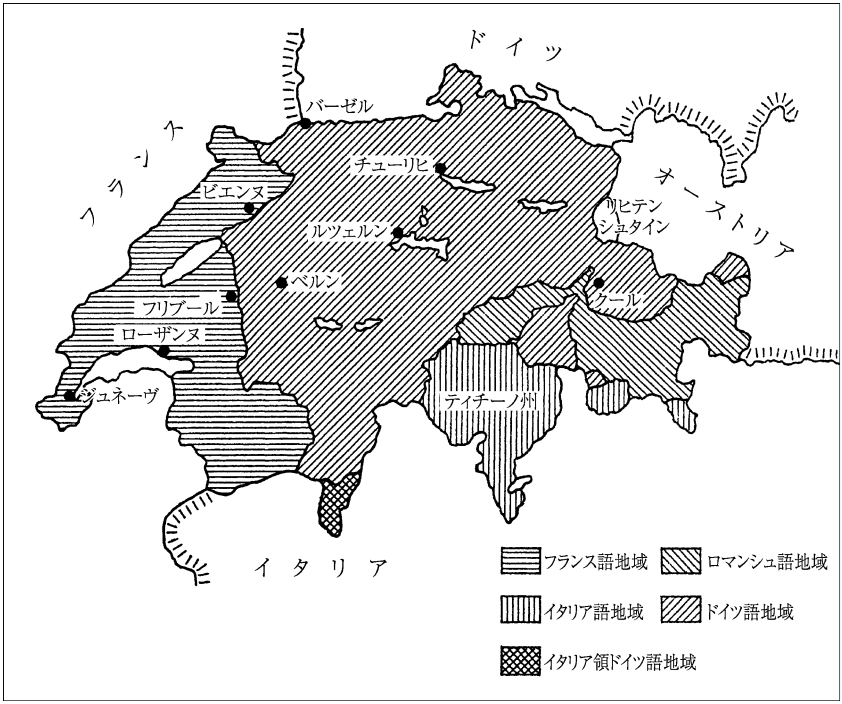
地図 11　中高ドイツ語（太線以南）と中低ドイツ語の使用地域（13 世紀）

（Paul/Mitzka（1966[18]：巻末），Robinson（1992：241）をもとに作成）



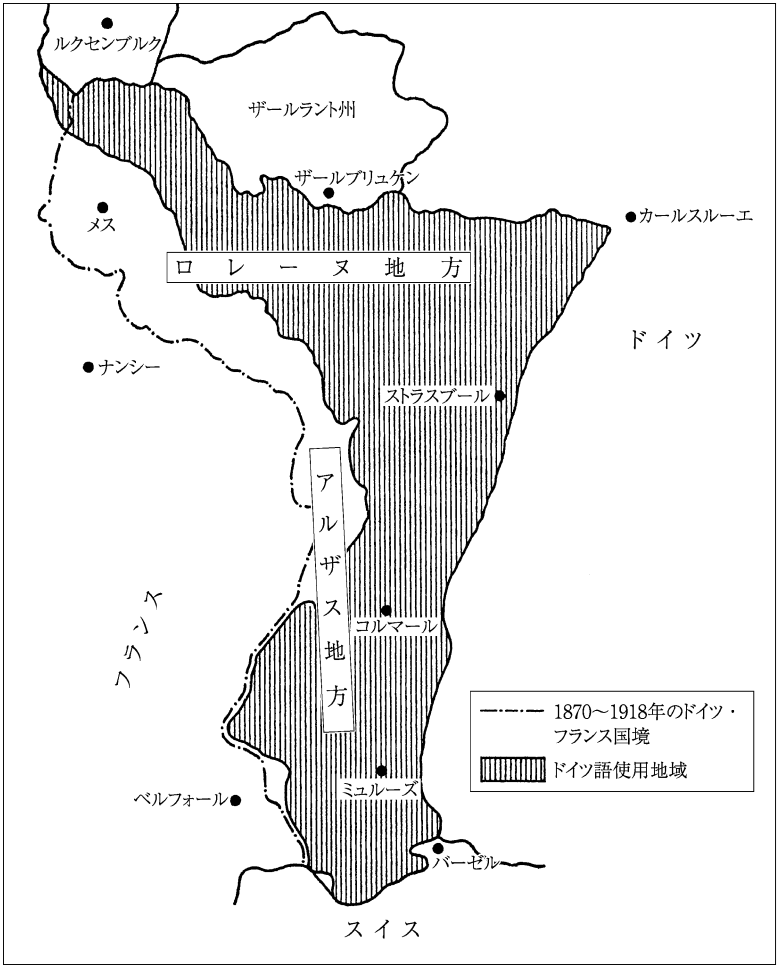
地図 12　高地ドイツ語子音推移と「ライン扇状地」

（Niebaum/Macha（1999：101）をもとに作成）

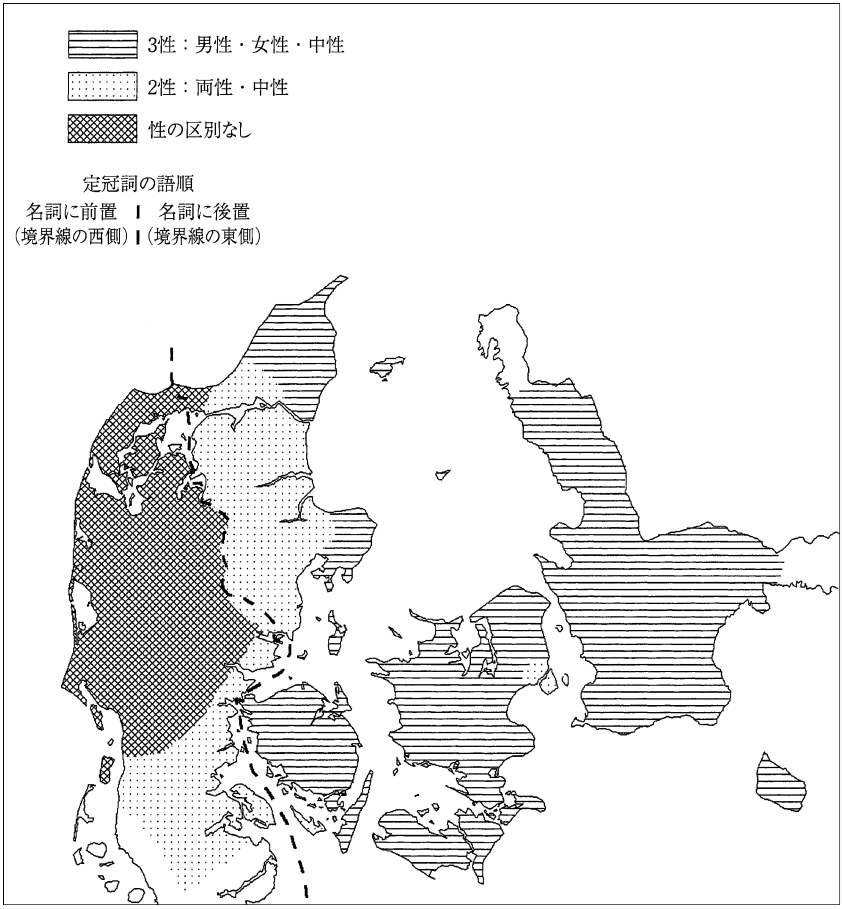


地図 13　スイスの多言語使用

（Lockwood（1976：161）をもとに作成）

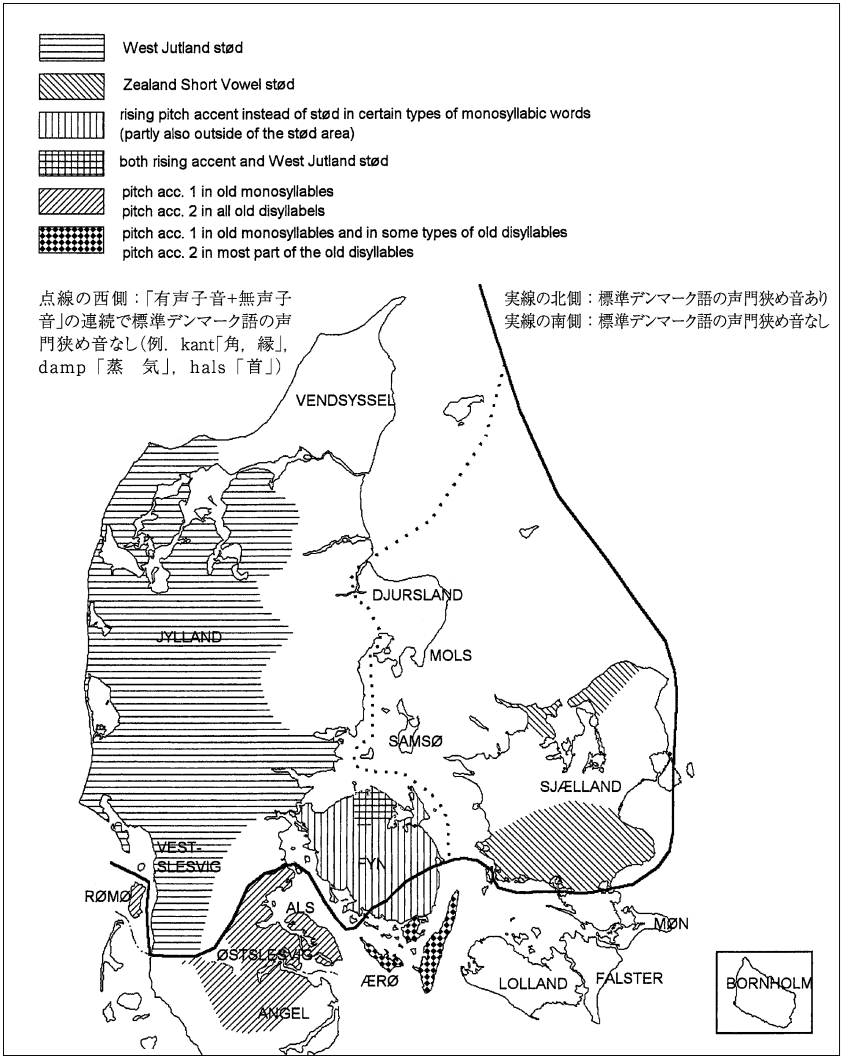


地図 14　フランス領アルザス地方・ロレーヌ地方のドイツ語使用地域
（Lockwood（1976：163）をもとに作成）



地図 15　北ゲルマン語の名詞の「性」（文法性）と定冠詞の語順

（Ejskjær（2005：1734）をもとに作成）



地図 16　北ゲルマン語の声門狭め音（デ stød）と高さアクセント

（Ejskjær（2005：1724）をもとに作成）

参考文献（前回までに挙げたものは除く）

Bremmer, Rolf H. Jr. 2009. *Introduction to Old Frisian*. Amsterdam/Philadelphia. Benjamins.

Ejskjær, Inger. 2005. 'Dialects and Regional Linguistic Varieties in the 20th Century III: Denmark'. In: Bandle et al. (eds.). 1721–1741,

Frings, Theodor. 1957³ (1948). *Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache*. Halle (Saale). Niemeyer.

Haugen, Einar 1976. *The Scandinavian Languages*. *An Introduction to their History*. London. Faber and Faber.

Lockwood, W. B. 1976 (1965). *An Informal History of the German Language*. London et al. Andre Deutsch.

Millward, C. M. 1996² (1988). *A Biography of the English Language*. Boston. Thomson/Wadsworth.

Niebaum, Hermann/Macha, Jürgen. 1999. *Einführung in die Dialektologie des Deutschen*. Tübingen. Niemeyer.

Paul, Hermann/Mitzka, Walther. 1966¹⁸ (1881). *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen. Niemeyer.

Quak, A./Van der Horst, J. M. 2002. *Inleiding Oudnederlands*. Leuven. Universitaire Pers Leuven.

Sanders, Willy. 1982. *Sachsensprache, Hansesprache, Plattdeutsch*. Göttingen. Vandenhoeck & Ruprecht.

Schwarz, Ernst. 1956. *Germanische Stammeskunde*. Heidelberg. Winter.

清水　誠．2009．『北欧アイスランド文学の歩み』現代図書

＊本稿は以下の拙稿の続編である。

「ゲルマン語の歴史と構造 (1)── 歴史言語学と比較方法 ──」（北海道大学文学研究科紀要 131．pp. 1–40．2010）

「ゲルマン語の歴史と構造 (2)── ゲルマン祖語の特徴 (1)──」（北海道大学文学研究科紀要 134．pp. 31–67．2011）

「ゲルマン語の歴史と構造 (3)── ゲルマン祖語の特徴 (2), 古ゲルマン諸語 (1)──」（北海道大学文学研究科紀要 135．pp. 41–88．2011）

＊本研究は科研費（21520425）の助成を受けたものである。

＊誤植訂正：

「ゲルマン語の歴史と構造 (1)── 歴史言語学と比較方法 ──」

38 頁　上から 2 行目　Bader, François → Bader, Françoise

「ゲルマン語の歴史と構造 (2)── ゲルマン祖語の特徴 (1)──」

37 頁　上から 10 行目　有気閉鎖音→有声有気閉鎖音

44 頁　注 22　/x/, /x^w/→/χ/, /χ^w/

59 頁　下から 11 行目　g$\bar{e}$bun → g$\bar{e}$bum

「ゲルマン語の歴史と構造 (3)── ゲルマン祖語の特徴 (2)，古ゲルマン諸語 (1)──」

53 頁　注 10　makring → marking

70 頁　上から 7 行目　ライン河畔→ルーア地方（ルール地方）

73 頁　上から 14 行目　ホルト→ホルティ

85 頁　上から 4 行目　Västgötalagan → Västgötalagen